



Title	明治維新前に於ける北海道鑛業史
Author(s)	南, 鐵藏
Description	研究
Citation	北海道帝國大學法經會法經會論叢, 10, 119-168
Issue Date	1942-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/10713
Type	departmental bulletin paper
File Information	10_p119-168.pdf



明治維新前に於ける北海道鑛業史

南 鐵 藏

序

鑛業の發展は以下にも説く如く吾人の體驗する所、經濟文化の比較的進歩せる人間間に於いて漸く見得る現象なりと私は思惟するものである。即ち之を歐洲經濟史に徴しても中世となり工業が小經營より大經營へと移行せし時に於いて鑛物の探索・鑛床の發見或は沼地炭田の採掘を爲し、特に金屬鑛業に於いて最も發展が明瞭に現れしものである。

扱て之が我國に在りては如何といふに中古假に大化の改新より武家政治の出現迄とす時代の初期に進めば家内（手）工業生産の大部分が農家に於いて現れ、鑛業に關する記事も此時代の初期よりして現れて來るのである。次いで奈良朝時代には銅が多く産出し、其他金・銀・水銀・鐵・鉛・白鑛等の金屬性と共に硫黃・石油等の非金屬性鑛物も民間採掘が許され銅鐵の調庸を輸する者には官採地の採掘までも之を許可されたのである。然るに住民の生活文化著く後れたる北海道に在りては其原史的經濟時代私案を漸く去れる松前藩の成立即ち徳川幕政時代に入りてより初めて事實（非傳説）として之が開發發展に入れるものである。

以下は明治直前迄を時期的最後の對象範圍とし、其發展の實情に鑑み、第一次發展時代(天正十八年より寛政十年に至る前松前藩時代)及び第二次發展時代(安政元年より慶應三年に至る後幕領時代)の二大時期に區劃して之を叙述することとする。

第一次發展時代

當代は斯業が本嶋に在りては以下にも述ぶる如く前代の説話的時代なるに對し、史實的に於いて初めて勃興し發展を見、其發展的性質が「主として民間の自主的活動に基く漸進的」なるを特徴とするといふことに於いて當代斯業の姿を把握し得ることを叙述せんとするものである。

一 當代に於ける本嶋鑛業成立過程の梗概

當代は松前藩の獨立せし天正十八年十二月より徳川幕府直轄時代に入らんとする寛政十年十二月に至る約二百年間とする。採鑛の業は等しく原始的生産業なりとはいへ漁獵・狩獵或は植物採取等とは異り直に以て人間生命保持の用に供するものに非ず、其目的は加工業に對する資源と爲さんが爲の目的に行はるゝものなれば之が興業者の文化的段階は大略原始的の生活より遙に進歩せる人々の生業として發せらるゝものと思ふ。當代本嶋住民としては和人と蝦夷であり、和人中にまた在來の土着者と一時的滯留者たる旅人とを以て構成せられてゐる。云ふ迄もなく蝦夷は依然原始的の生活者であつたが和人は當代に至れば或は日本本地人の入來と又在來の者も其感化を受けて生活は向上を來した。而して此中當代本嶋鑛業に當れる者は日本本地より單獨渡來せる和人であり、和人中にても先づ日本本地よりの人々が首位を占め、加ふるに在來の土着者も參加したるであらう、蝦夷また之に従事した。

人間棲息するも資源無ければ産業の起らざるは當然である。然るに本嶋は金屬は因より非金屬的鑛産物にも富

む。其當時知られたる分布砂金の如き或は河床に或は海邊に或は山岳にも存在し、其他の鑛物も或は山頂に或は山腹に或は平地或は地下等夫々に和人地・蝦夷地に亘りて之を見るが、而も存在箇所の数より之を觀れば概して本嶋東側に多く兩側之に次ぎ中央部最も尠きが如くである。

當代に始まりし本嶋採鑛に關しては當代初頭先づ幕府其手持鑛山の減産より本嶋に着目して、之が開發を促さんとせしも本藩は其開坑を好まず極力之を回避した。これ藩の維持上後患の因の生ぜんことを慮つてであつた。然るにも拘らず事實は其反對に其後いつしか砂金掘鑛々々入來し一時盛況さへも極め爲に藩の貢納に依る收入も尠なからず、藩庫の一大財源を成した。然るに寛文九年となるや蝦夷蜂起有つて遂に之が楔機となつて廢絶するに至つたのである。然し此時迄に斯鑛は既に其大略を採掘し盡されてゐた。其外銀・銅・鐵・鉛等も其後夫々試掘を始め、發展形態は漸進的に形成せられしが産額の割合に矢費多くしてこれ亦何れも兩三年にして廢絶に及ぶもの少なからざりしものゝ如く、其他非金屬鑛としても硫黃・石炭・石油を始め利用の途を知らざることゝ誰とて採取せんとする者もなくして唯徒に放棄しあるの狀態にて次の時代へと移行せしものである。

我國に於ける本嶋採鑛に對する關心は斯く至つて等閑なる狀勢に在りしと雖泰西の我國への着目は本嶋は固より千嶋樺太へも及び、ロシアの南下は殊更本嶋鑛界に影響を與へたるものである。即ち

我が建治元年¹⁸⁷³ベネチヤ(伊太利)の人マルコポーロ Marco Polo 支那に赴き元に仕ふること十七年の後永仁三年郷里に歸り東洋紀行を著し、一千五百哩の海上にジバンク(即ち日本のこと)といふ大島ありて其產出する黄金の無盡藏なることを記し尠からず世人を驚かした。これ金銀島説の嚆矢であるが、其後十六世紀の交に入るヤイスパニヤ及びポルトガル兩國航海者間に金銀島ありとの説傳へられ慶長三年¹⁶²⁶イスパニヤに在りては總督ドン・ルイス・デ・ベラスコに命じて之に當らしめしが、彼は更に同年探檢航海に長じたる老功者セバス

チャン・ビスカイノ Sebastian Vicaino を擧げて此探檢の實地に當らしむることとした。同十五年ドン・ロ
 ドリングゴ等遭難し、メキシコに還り日本によりて送還を得たる旨報告あり、仍て取敢へずビスカイノを遣し答
 禮使といふ名に於いて翌十六年六月我國に到り、家康・秀忠に謁見す。次いで其使命も果したりといふ貌に於
 いて此機會に將來航遭難豫防も爲し置きたしとの要望にて沿岸の測量を遂げ、此時蝦夷嶋のことも聞知する所
 あり、同十七年九月十一日浦賀を出發して目的の金銀嶋探檢に向ひ、十月十二日に至るまで廣く海上を搜索せ
 しが斯くした嶋の發見も遂に得ずして空くサンフランシスコに到る。而して金銀島探檢の噂は尙其後も絶え
 ず、次いでオランダはビスカイノの探檢を聞知せる東印度會社員の建議に基き寛永十六年マテイス・クワスト
 Mathys Quast 及びアベル・ヤンスゾーン・タスマン Abel Jansz. Tasman に命じ探檢航海に就かしめしも結
 局また目的を達し得ず、約半歳の後兩船は臺灣に歸着した。其後尙も同二十年二月マールテン・ゲルリツツ
 ーン・フリース Marten Gerritz. Vries を指令官としカストリクム・ブレスケンスの二船を以て此探檢航海
 が行はれた。途中兩船は暴風に遭ひカストリクム號は本(蝦夷)嶋十勝に至り此嶋を初めて見、エトロフに到
 り更に北行せしも霧多くして危険なるにより針路を西に轉じ、韃靼方面に向ひ樺太に到りて歸途に就きウルツ
 プ・エトロフを過ぎ、厚岸に寄港、此地滞在十七日間船體修理、食糧準備の上出帆二十餘日間金銀嶋の所在を
 探しかども目的を達する能はず、歸途四國の南海にてブレスケンスに遭ひ相伴ひて歸還せり。歐洲船の日本北
 海を探檢せるはカストリクムを以て濫觴とす。然れども其觀察にはウルツプ島を以てアメリカ大陸の附近と爲
 し、樺太と蝦夷との兩島を分別せざる誤謬あり。尙此後も航海の途次之を探索せしもの少からず。元祿九年イ
 スパニヤ船、元文四年露西亞人スバンゲンベルグ (の日本東海探り)、天明七年佛人ラベールス、寛政八年英
 人プロートン、文化元年二年露人クルーゼンステルンの探索あり、慶長以來二百年間斯くした我國東海への外

1653

1686

1701

1711

1726

1736

1741

1742

1743

1744

1745

1746

1747

1748

1749

1750

1751

1752

1753

1754

1755

1756

1757

1758

1759

1760

1761

1762

1763

1764

1765

1766

1767

1768

1769

1770

1771

1772

1773

1774

1775

1776

1777

1778

1779

1780

1781

1782

1783

1784

1785

1786

1787

1788

1789

1790

1791

1792

1793

1794

1795

1796

1797

1798

1799

1800

1801

1802

1803

1804

1805

1806

1807

1808

1809

1810

1811

1812

1813

1814

1815

1816

1817

1818

1819

1820

1821

1822

1823

1824

1825

1826

1827

1828

1829

1830

1831

1832

1833

1834

1835

1836

1837

1838

1839

1840

1841

1842

1843

1844

1845

1846

1847

1848

1849

1850

1851

1852

1853

1854

1855

1856

1857

1858

1859

1860

1861

1862

1863

1864

1865

1866

1867

1868

1869

1870

1871

1872

1873

1874

1875

1876

1877

1878

1879

1880

1881

1882

1883

1884

1885

1886

1887

1888

1889

1890

1891

1892

1893

1894

1895

1896

1897

1898

1899

1900

國船の出沒は殆ど皆金銀島探檢に外ならなかつた。又此間漸進的に行はれたるものは露人の南下である。

露人の南下は「三國通覽補遺」に依れば露西亞は寛文の頃勢力を伸長し、正徳の頃カムサスカを従へ、享保頃千嶋を侵蝕すといひ、天明三年工藤平助の「赤蝦夷風説考」に依る時は紅毛書を考ふるに享保頃ムスコビヤ人露西亞國王の下知に依りオランダのカピトンと共に南日本の地方へ調査に來り、明和八年又々露人我國沿海の深淺を委しく調査したり。平助の意見としては之れ軍兵の襲來の準備とも思はれず、彼は日本の金銀多きを知り切に之が交易を望みしは數十年來の事にして恐らく之を意とせしなるべし、蝦夷地には金銀銅ありと云はる、宜く之を我國の入用物と交易用辨し從來の海外拂の銅を省き、拔荷制禁の令を嚴にし、其利を以て蝦夷地産業を開發せば自づから國力の充實を致すべし。左も非ずして徒に時を失せば遂に蝦夷のロシヤ風靡も免れざるに至ると警告した。江都開府以來幕政糜亂奢侈淫蕩其極に達せし所謂田沼時代としては此先驅者の言は一大警鐘であつた。時恰も幕府財政は以上の情勢より急迫を告げつゝありし時の事とて諸種物産の專賣を始めとし、利源開發の積極的方策に及び鑛山の發掘を獎勵し、從來の金座銀座の外銅座・鐵座・眞鍮座をも設け、すべて之を幕府にて其賣買を管理せし情勢に在りしが故に、献白書として提出されし風説考には勿論意が傾注せられ、勘定奉公松本伊豆守は田沼より蝦夷地調査の命を受け、尙之を勘定組頭土山宗次郎に諮りし所同（天明）四年宗次郎より詳細なる報告が到着、愈々幕府は世情騒然たる裡に蝦夷地實地調査の方針を決定し、十月幕府は蝦夷地通路の實況と共に金銀山産物等調査の爲普請役山口鐵五郎外四名其他下役を派遣見分せしむ。同六年二月此調査に基き松本伊豆守は成案を得意見書を老中に提出、蝦夷開國當に實現せられんとする時將軍家治は病死し、田沼は其職より黜けられ遂に蝦夷地事件は中止の姿となりしものである。

斯くの如きを以て事實として當代本島鑛業發展を出現せしめしものは例へ一時的なりしにもせよ、和人民間で

あり、而も彼等の自主的開發に爲されしものに歸着する。

二 當代に於ける本嶋鑛業の特徴

本項に於いては當代本嶋探鑛業が幕府又は藩府の經營又は援助に成りしものに非ずして全く民間の自主的活動の一端として漸次出現せしに至りしを特徴とする發展の經過を敘述せんとするものである。

本嶋の探鑛が當代に至りて初めて擡頭せしものと稱し得ること及び其地域が當代既に本嶋西側・東側及び中部の三大地域に跨り、而も此等よりは金屬鑛として金及び其他約五種、非金屬鑛として硫黃及び其他約十種を産出すること既に説きしが、先づ此三大地域中産地箇所が多寡に依りて之を觀れば東側最も多く、西側之に次ぎ内陸最も尠し。今其地方を示せば次の如くとなる。

東側

〔大澤村、知内村、箱館村、湯の川村海邊、大森村、石崎村、釜谷村、エサン、カヤベ、ユウラツブ、クンヌイ、ユウフツ、エリモ岬、トカチ、クスリ、アツケシ、ニシベツ、クナシリ島〕

西側

赤神村、清部村、豊部内澤、原歌村、江差村、見市村、熊石村、スツキ、イワナイ、ハホロ

内陸 淺間岳（和人地）ユウハリ、シヨツ

此等の地方より出づる鑛物は金屬としては金・砂金・銀・銅・鐵・鉛であり、非金屬としては硫黃・石炭・石英・硯石・石垣石・碗青・明礬・鉛粉・臭水（石油）・鑛泉（温泉）等である。

以上の鑛物に於いて **金** は既に前代に於いて之が傳説を見るに至りしが、之が當代に入りては慶長九年將軍

家康本多佐渡守正信をして本藩々主慶廣に金山の處置を促さしめ同十三年幕府其探掘を爲さんとし、元和三年東部曾津湖及び大澤同七年知内より、寛永五年淺間岳同八年西蝦夷地島小牧より之を出し、以降盛衰を辿りつゝ當代末期に及ぶ。斯くして本島全鑛物中金のみは疾に日本本地人の着目せらるゝ所となり、探鑛の盛況も見しと雖他は殆ど微々として振はざるか然らずんば多くは例へ有用鑛物なりと雖空く自然の儘に放棄し在るの状態にして

即ち **銀** は寛永八年西在赤神村より、**鉛** は延寶中東蝦夷地ユーラップより、**鐵** は貞享頃箱館在シノリ

より、**銅** **硫黃** に就きては元文三・四年頃より其採掘あるべきを説かれ、非金屬としては、**石炭** **石油** **明礬**

鉛粉 **石英** **石垣石** 等が天明元年頃其存在を説かれてゐるのみであり未だ採取の機運には至らなかつた。

而して此等幾分の興發も皆和人而も日本本地よりの鑛山師等の採掘紀行者、學者等の着眼であり、本嶋民としては松前廣長の如き學説が唯稀に見らるゝの外は勿論蝦夷の採鑛等ありしを聞かず。今更に此等各種の當代に於ける経緯を次に觀察することゝなす。

〔金〕 金にも金塊と砂金とあり。砂金を「ミヨシ金」又は「芝下金」とも云ふ。

蝦夷地風俗書上（天明三年） みよしとは砂金の事也

蝦夷草紙（寛政二年頃） 芝下金ト云フモノニテ土砂ノ中ニ交リタル砂金ナリ

本島砂金の採掘の濫觴に就きては既に前代より其説あり。「知内村大野土佐日記」に従へば元久二年（1865）筑前の漂流船炊夫知内に上陸瀧の水を汲まんとし、金塊を發見、甲斐に歸り、之を荒木大學に呈し、大學更に將軍頼家に獻せしに頼家大いに喜び大學をして之が採鑛を命す。大學同年七月屬吏及び鑛夫千餘人を知内川流域に到らしめ採鑛せりと。然れども之は修驗者の手に成れる記録なれば直に信は置き難し。然し乍ら之を文化史的觀點よりする時は假令之が直接的には單に一説話的材料に止まるとしても少くも之に因りて往古より本島産金の觀念が存在せしといふことの強調的史料の構成することは事實であると云ひ得よう。

當代に於ける金の採鑛に關しては慶長九年一月徳川家康本多正信をして蝦夷嶋金山あるべし、之を言ふ者ありと雖其處置は慶廣に任すべしと告げしめた。然れども慶廣は之に因つて將來藩の禍根を招かんやと慮りて之が採

掘することを好まず。

新雜の記録（下卷）同（慶長）九年正月廿四日 大將軍家康公爲ニシテ本田佐渡守正信承レ可レ有ニテ狄三嶋中金山ニ而雖望者言上ニ所レ任置慶廣ニ之山被ニ仰出ニ、然共慶廣朝臣之代者 監 遺 事 不 立 金山 一

果して同十三年鑛山師江戸より松前に來る。これ當時幕府の探鑛に係る佐渡・伊豆の鑛山が漸く其産額を減じたるを以て奉行大久保長安は陸奥と共に本島の金坑を開かんと欲し、彼等を派したるものである。然れども本藩々主慶廣は此地邊僻にして糧食乏しきと稱して之を謝絶して歸らしめしものである。

藩は幕府よりの發動に對しては斯く之を忌避せんとしたりと雖、藩の自由裁量の範圍に於ては藩の一大財源として日本本地、秋田・南部・洞輕よりの探鑛夫入來蝦夷と共に其探掘をいつしか認めるに至つたのである。

當時採金の方法は元來本島の産金（砂金）は河床若くは海濱に存在し、或地方には其量豊富に發見すると雖其面積廣大なるには非ず。砂金は表土を發掘し、其下に有る合金砂土を取りて淘汰するを普通とすれども、水源に在りて覆土厚き所は坑道を穿ちて探掘するの外なきが如し。

即ち元和三年東部會津湖及び大澤より之を出し、同六年藩主公廣壹百兩を幕府に獻するの趨勢にも至り（然れども幕府其金及び金山を公廣に賜ふ）更に知内の砂金の如き同七年より多量に産出し、其水源の千軒（淺間）岳の金坑の如き寛永五年に創開し、金山奉行に蠣崎主殿友廣、同右近宗儀を命じ、鑛山師は日本本地人にて即ち仙臺の人喜介なる者なりといふ。同八年には西蝦夷地シマコマキ、西在赤神に白金、同十年には沙流場所（日高）のケノマイ・シツナイ場所のシブチャリ、同十二年ピロウ場所（十勝）のアイボシマ及びサマニ場所のウンベツ、次いでクンヌイ・ユウバリ等にも砂金を出す。斯くして彼の寛文九年の蝦夷蜂起に至る迄五十餘年間に亘りて繼續せられ、約二萬人の金掘入り込み就中以上の如く寛永年間が最も盛んなりしが如く、知内・トカチ・ウンベツ其後クンヌイ・ユウバリ

の五箇所は同十八年頃迄繼續したり。「蝦夷地風俗書上」に謂ふ「クヌイの東サルと云ふ所古來金鑛共數千人入込數千戸の住家の跡ありと稱してゐる。」といふも蓋し此頃なるべきか。然るに此亂後藩の和人蝦夷地入を制禁したる爲延寶五年頃より遂に一時之が廢絶となるに至りしものである。然し乍ら此大亂までには大抵は採鑛し盡したるものゝ如くである。降つて貞享二年には西蝦夷地宗谷より、元祿三年には同ハポロ海濱に藩吏及び鑛夫數十名を遣して之を採取す。同五年秋ウムシムテと稱する蝦夷夷亂あるべきことを唱せしより六十人の鑛夫逃れて福山に歸るに及び産金量も減少し、又兎角交通不便の地なるに相因みて收支も相償はず衰微に傾く一方、尙も其後更に七八年間も二、三人づゝの鑛夫此地へ採掘に赴き一人百匁二百匁を採取したりしも米穀諸色の高價なるに加へ、産金量も愈々減退を重ねるに及び其後間々試採者無きに非ざれども一向振はず、遂に廢止せらるゝに至りしものである。

斯くして元祿年間を以て一時終熄の姿となりし本嶋採金業も尙此地本産に富むの世評息まず、其約三十數年後なる元文元年十一月金座後藤庄三郎手代坂倉源次郎なる者本藩本領分界圖を作成し、領外（蝦夷地）の金鑛を幕府に告ぐ。仍つて幕府同年十二月源次郎に松前金銀山の探掘方を命じたれば源次郎は探鑛夫を南部に募り松前に至る。然るに翌年に亘り見分せしかども得る所なくして歸る。同（二）年幕府は更に庄三郎に命じ西蝦夷地宗谷に砂金を探索せしめしかども亦遂に得る所なくして歸府すと。

（當時の源次郎等渡來の記事としては、單に元文二年金座後藤庄三郎幕府の許可を受け、坂倉源次郎を派遣し翌年に亘りて探索せしめし得る所なくして歸るとありて源次郎の渡來の年）同三年二月幕府松前藩に命じ金銀産出の量或は庄三郎の渡來に就きて格別に記載なき等多少相違せるものもあり。

（多羅尾忠郎北海道鑛山略記）然し源次郎が其著「蝦夷行記」に「松前領内にては仙見嶽・シリウチは云ふに及ばず東蝦夷地にてはクヌイ・ウンヘツ・ユウハリ・シロツ等をはじめ一場所とても數十里にわたりたる場所所有て廣大なる事ともなり。西はハポロとて是は海より上る砂金なり。松前は日本本地の金山のみより産出するのとは

異り山川原野を問はず土地一面に生ず」と記す。其産地面積を説くに多少誇張の嫌無きを思はしむと雖實檢者の言として當時の概況を窺ひ得るの資料たるには其貴重性を聊も抹消せず。次いで明和三年（「北海道史第一」には「明和三年」）（「松前志」には「寶曆年中」とあり）江戸の入山城屋安右工門幕府に請ひ、小人日付宇佐美仁左工門（「松前志」には「寶曆年中」とあり）矢澤友藏と共に渡來、之を「三國通覽補遺」にはクンヌイ川より三里上にミヨシ金の檢分を爲せるも子細ありて止むとあり、「松前志」にはクンヌイ邊諸山を發掘せしも金銀を得ずして歸府すと記さる。次いで天明三年工藤平助の著せる「赤蝦夷風説考」を原本とせる「三國通覽補遺」に依れば西蝦夷地スツキに古來より金掘多く入り込み今其當尙其跡存し、東蝦夷地エリモ岬亦古來諸國より金掘入込みしが、蝦夷蜂起の節盜掘の者百人を捕へ、松前藩之を死刑に處したり。因つて之を百人濱と稱し産金至つて多しといひ同年の記事（「蝦夷地風」に依れば西蝦夷地ハポロにミヨシ金の産出ありて先年松前家の家來野村與五右工門なる者其係にて此處に至りしと云ふ。然し公的には寛文蝦夷亂に於ける和人の蝦夷地入りの禁は尙天明四年頃に至るも解かれざりしと見え、シリウチ・ハポロ・ユウラツフ・クンヌイの地産金多しと雖今は國禁にて採掘する者なしとも云つてゐる（東遊記）。但しハポロにては極寒地なれば冬越をせんとなれば凍死を免れず（三國通覽抄）とも稱せらるゝよりすれば斯業不振の原因は此方面よりもまた觀られ得る。次いで寛政二・三年頃の「蝦夷草紙」には既に東蝦夷地ウラカワにも砂金を採取せし跡有りとし更にエトロフ・ラツコの諸嶋にも注視してゐる。

以上は専ら産地を標準としたる採金業趨勢の年代順的説明なるが、要するに其産氣多きことは餘國に比すべくも非ざる如し。然れども之を採取せし者は多く日本本地より來れる和人であつた。而して採金を爲すには一人一箇月砂金一匁づゝの運上を松前藩に納むるを要するが、これ收量高の三分の一に相當り、殊に知内の如き數十萬兩の砂金を擧げ役所に集まる所の砂金澁紙に山積せしと云ふ。砂金は此地にては元文に近き頃より小判代用に

使用し始まり慶長小判一兩に付き砂金七匁二分、砂金一匁に付き錢六百文替としたり（「蝦夷行記」「蝦夷舊聞」）。而して藩は歳暮の時等御祝儀として砂金十匁づゝを諸家中へも與へしと。然し斯かる貴重なる有用鑛物の豊富なる存在の採取者中には、之を不正なる手段に據つて獲得せんとする者も出現せり。これ諸國より數千人もの鑛夫が入込みしといふ東蝦夷地エリモ岬が夫にして松前藩にては寛文の蝦夷亂の時、兎角蝦夷の不快を誘發せしめし和人盜掘者百人を此地にて斬刑に處したる前述百人濱の由來よりも其一端が窺はる。斯くして本嶋採金業は初め兎角公儀的に日本本地より採鑛の督促を享くることは藩之を好まず、極力敬遠せんことに努めつゝも内質多數の日本本地の採鑛者の入嶋を認め一時的にも其盛況を極めしことである。然るに時を經るに従ひ或は亂獲に因り、或は蝦夷亂を楔機として遂に衰頹の姿となり、當代末期に至り尙其殘存の見込無き能はざるを最上徳内も評論し居るも兎角該亂後は殆ど之が再興の傾向を失ひたり。

〔金以外の採鑛〕 **銀** は寛永八年西在赤神村より出でしを濫觴とし天明に近き頃西部トヨベナイ鉛山より少しく出でしも利なくして止む。而して之に關し坂倉源次郎の元文四年の「蝦夷行記」に依れば「空しく打捨あるのみ」と稱して其資源の必ずしも絶無ならざるを説けるが此實事は後代文化五―八年頃東蝦夷地シツナイ場所シビチヤリのアフカシアンペン山（東蝦夷夜話）文化文政中ウナベツ（野作）場所土人の話（野作）に於いて之を産出すると云へば或は寛文蝦夷亂が楔機となりて其再興の機を失ひたるには非ざるか。降つて寛政二年に至るも尙其存在は東西の山に之を認むと雖古來より銀山の沙汰は無しとて未だ其採掘の機運至らざりき。

〔鉛〕は「松前東西管闡」に曰ふ、天明八年より百三十年以前東蝦夷地ユウフツより發掘せらると、即ち萬治元年頃にして、これ記録としての嚆矢なりと思ふが、然し事實としては誤傳の點なきや充分なる考證を要す。其後又々出願したれども鉛鑛不足にて止む。次いで延寶中同じく東蝦夷地ユーラツ山に之を出し正徳三年には西

在江差村笹山の約四尺の鑛脈より鉛鑛に銀を含めて一日二十四五貫を産出し、又同トヨベナイよりも之を出し、明和三年には同村の出稼岸田市三郎其産鉛の減ぜしを以て翌四年十箇年間産額の十分の一の運上を以て、ユーラップ鉛山の發掘を出願し許可を得しが利なくして止む。然るに此年西在赤神村よりは藩吏此地に到り、開吹鉛四枚を持參し、一枚の量八九百匁より一貫六百匁に上れりと。「松前東西管闕」に西在豊部内澤山の事天明八年山見立穿候で一兩年は少々づゝ出候所出不足に付前同斷（相止め申候）」とは何時頃の事なりや。寛政二年頃の「蝦夷草紙」（下巻）に依れば西在見市村の奥ヲボユ嶽最上にして江差村の者發掘せし時一箇年三百箇を得たりと。其他赤神村江差村にも存することを説けり。

鐵 は貞享頃江州西川庄右工門なる者東在シノリ村の鐵砂採取を出願せしも一、二年にして止む（北海道史 第二五四頁）後採掘出願者ありたれども品質劣り且つ産量不足にて廢止となる。又一説に「東在に於いてシノリに鐵吹仕度段江州西川庄右工門と申もの天明八年迄にて三十年以前願達一兩年致見」とある即ち三十年以前とは寶曆八年である。恐らく此兩説は同一事實を謂ふものにして蓋し貞享説の方が正確に近かるべきか、尙再検討を要す。又正徳中同じく甲屋平七も出願、間もなく廢止す。越えて天明元年の「松前志」に「クロカネ即チ鐵ナリ東部シノリ海邊ニ鐵アリ故ニ湯ノ川海邊鐵砂多シ」としてシノリ湯ノ川海邊の鐵の存在を記されて居る。然し之が採鑛のことは觸れ居ず。次いで寛政二年の「蝦夷草紙」（下巻）に函館在の大森・石崎の兩所に存在し、其他所々に多しとある。されど採鑛のことに及ばざる前記と同じ。同十一年谷元旦の「蝦夷紀行」（下）に釜谷村濱に鐵鑛あるを見受けたりと。

銅 は元文四年頃の狀態を以てすれば此地を見分せし坂倉源次郎の如き銀山等と共に見知りたる者として無く、唯放棄しあるのみなりと稱してゐる。又寶曆十三年八月には西在上ノ國銅山の採掘出願者ありといふが其成績明

ならず。次いで天明三年の記事（「蝦夷地風」俗書上）中に依れば本藩々士が藩主より歳末の祝儀として青銅十匁宛を賜るは先祖六代（盛廣 慶長五年 同十三年一月治世）前砂金十匁宛を賜りたる古例に由来すと云ふが、此銅は本島産のものなるか、尙同書に曰く「東に恵山と申大山有之は銅山にて硫黄明礬の類も出候處也此處箱館の町人白鳥新十郎と申を先年より商賣掘いたし近年相休候」とある。採鑛せる先年とは何時頃なりしや詳ならざるが少くも天明三年より相當以前なることのみは明である。又同年の「赤蝦夷風説考」に松前より西の方三里赤神の地夫より先清部の地銅を産す東のかた箱館にエサンの銅山あり、東蝦夷サルの地往古採鑛の夫數千人群集し家數千軒ありと云「ひサルの銅山は往古威況を極めし如く而も之はサル場所中シユ銅山及びチロ金銅山なりと云ふ。次いで寛政二年頃を記せる「蝦夷草紙」に依れば函館在の山及東蝦夷地シベツ（ネモロ場所）の奥山に在りとして銅山あるを示し、又當代末期同十一年谷元且は東在釜谷村海邊岩嘴に銅箱銅鑛の類有りとして何れも其存在のみを述べてゐる。

硫黄・石炭・石英・硯石・石垣石・碗青・明礬・鉛粉・石油一は皆天明元年松前廣長の之が存在を示す所であり、此中硫黄は東南の方山多く高山の絶頂の多くは之に富むとして元文四年坂倉源次郎の既に認め居し所であり（蝦夷行記）天明三年運上金二十兩を、又翌年より三箇年間同三十兩を以て福山の藤七・理三郎の兩人採鑛の許可を得寛政九年より五箇年間森瀬屋治兵衛許可を得て稼行し、岩内は前既に採鑛し運上屋元へ搬出せられ居しものである。石炭は東蝦夷地釧路より、石英は同クンヌイより、硯石は西在熊石村より、石垣石は同原歌村より、明礬は東蝦夷地エサンより、鉛粉も同斷、石油は東蝦夷地エサン及びカヤベより産出すと。然れども何れも唯空く放棄しあるの状態であつた。

温泉 傳説的には寶治元年知内山中に既に發見せらるゝを見る。（知内大野）而して史實としては貞享三年九月本藩々主矩廣知内温泉に入浴せし事實あり（福山秘府年曆部卷之五）、天明三年同所温泉の記事あり（赤蝦夷風説考）、又寛政二年頃

には西在乙部・見市・平田内・湯臺・東在大澤・尻内・湯ノ川・カツクミ・鹿部・留ノ湯・東蝦夷地シベツ其他に認められてゐる。

三 當代本嶋鑛業の發生・發展特徵及び其衰微又は不發展の理由

當代本嶋鑛業は先づ採金業に於いて他の諸鑛業に比し著き盛況を見るに至つた。然れども固より落としては公開したるにも非ず、寧ろ島内採鑛の一般公開は極力之を忌避するの態度を持した。然るにも拘らず斯く盛況を致したるは蓋し本鑛^{主とし}砂金の豊富なることは勿論なれども斯かる状態が疾に日本本島間に知られしこと特に幕府が伊豆の鑛産の減産に因り此地に着目せしことは日本本地斯業界の耳目を刺戟したるべしと同時に落としても非公開且つ自己意中に適合する範圍にて有利に展開せんならば鑛山師鑛夫の入來は勿論蝦夷の採鑛も敢て差支無く又之を寧ろ望みもしたるであらう。先づ此等が與つて斯業發生は固より更に盛況を促したる動因となりしことであらう。然るに之は寛文九年までの一時的なる盛況に止まり此亂を楔機として以後は遂に不振の儘にて終熄したるものである。其他の金屬鑛たる銀・銅・鐵・鉛等も夫々其後に至りて採掘擡頭し始めしと雖、其漸進的形態を探れることは採掘初期としては自然の趨勢なるべく而も幕府の此事業に着手せんとしたれども落之を謝絶し、落に其處置を促せども表面また積極的に乗出さず、従つて其結果活動は民間の自主的となるに至れること亦當然といふべきである。然るに之も多くは經費と産量との關係に於いて其利相伴はずして廢絶に歸し、後期に至るも夫々鑛塊尙各地に散在すと雖以上の理由によりて空しく放棄せられ在りしものゝ如く、又硫黄を初め數種の非金屬鑛の分布あり。特に硫黄と石炭との存在又は埋藏量の多きなるにも拘らず土民其製法を未だ知らざりしが爲亦空しく放棄しあるの状態にして、元文四年坂倉源次郎は「此地砂金を取ることをしりて金氣の蔓を追て窟中へいる事をしらず、これにより以前より金山を掘と云事はなし、今稀に見るに掘たるあとなきにも非れども砂金を見かけて掘

たるにて金石を目當に掘たるにてはなし、夫故銀山銅山等は猶更見知たるものともなく唯打すたりてあるばかりなり」と云ひ又最上徳内が寛政二年に「エサン山上明禁あれども土俗製法を知らざるによりて空しく捨置くなり」とは即ち斯業の斯かる不發展を物語る注目すべき一面ならんか。而して當代末期に及ぶや幕府府庫と世情の逼迫に遭ひ遂に幕府は此空しく放棄し在る嶋内殘鑛に着目し、官營として斯業の開發に着手せんとせしも府内政變の爲に亦これ中止の姿となりし儘當代を終へり。

以上引用並 參考文獻記事

(配列は引用・參考順に據る)

知内村大野土佐日記

元久貳筑前船及漂流に日久敷し……漂流處遙に北に壹の島見出……彼嶋に馳着……陸地へ上り候處は知内濱邊の山……此所彼所と驅廻り……何心なふ邊を見候得は彼瀧の下に光る物有之候故取上候見候處似石非石如何様丸かせとも言物ならんかと則取上桶の中ひ隠し扱夫より船中ひ立歸り其金手桶の中より取出し密にて其金を放す持居ける頃は元久貳年四月中旬日和も相直り候故順風に帆上げ日を経て筑前ひ趣候故夫より右の炊無程暇を相願生國甲斐ひ立歸り則當主甲斐の國いばら郡荒木大學殿ひ差上げる大學殿にも右の丸かせ一覽被成殊の外御喜悅に思召扱かゝる希代の珍事此通にも難差置其頃の將軍源家二代の嫡流源頼家公へ献上仕將軍家にも右の金御一覽の上甚御満足不殘將軍上竟には蝦夷は嶋と中處に金山有之由炊の者爲先達其元彼の地へ趣き金山見立中旨被仰出扱又炊の者遠路の所丸かせ致持參候褒美として千石の御知行將軍家より被下置大學にも餘其身難有奉存早速下宿の上炊の者此度將軍家にも甚以忠心の段殊勝に思召當座千石の褒美被下置候趣一家中へ觸流し早速家中並に被仰出荒木外記と改名被仰付亘五十石の御加増にて都合千百五拾石に相成是より子孫永々續代々荒木家傳りしと也大學殿にも御暇蒙り旅粧の上掘子の者八百人御雇家中旁々既に千人余りにて及支度に候此内荒木家志山本多作鷺尾吉右衛

門爲惣支配人同家中兄弟の者喜作與作其外數多家中附參り候得共礎に相分り不申此四人は所々に舊跡相殘候故に是に記置候外に修給者を壹人金山察の爲狀達被成候右の者則大野了德院是當家の祖是の元はるばらの郡八幡別當の由扱夫より大學殿にも纜を發し同年六月廿日に出船同七月廿三日海上安全にて當國失越迄無事着於此所に爲武……夫より瀧傳へ被通候て暫く脇本成沖に亭礎を卸させ四方の風景を詠め誠に繪に畫に共筆に不及る有様山高て此地千里の粧如何様ケ様の景色人倫の住非處日本を去る唐土の地にも渡りし心地にて暫く櫓に御上り東西一覽被成候處美く敷しき女子壹人濱邊を通り大學殿の御船遙に伺袖を拂て歸らんとす其時荒木殿御船濱に漕寄せ女人に御尋被成候は、爰は蝦夷か千嶋連人間の非可住處見れば不殘人跡成る何何共なれば邊鄙の地には致居住候哉と御尋被成候得は女人御答申上候には御不審御尤に候私事は則此山に年久敷しく住居仕居候イノコと申女にて候私形は此山の影に御座候と申上候至今蛇の鼻並にイノコ泊と申處此謂成の由爰に書記置候其時大學殿被仰には凡人とも見受不申故御尋申候拙者儀は甲斐の國伊原の郡荒木大學と申者也此度金山見立として將軍家より被仰付今爰には來る也若此邊に宜敷金山有之候は、教へ可給旨被仰ける其時イノコ御答申上候には仰の通右金の有所は私能く存居候私儀も此寶の朽なん事を而已愁と思煩候所に今貴君の來絶を見侍りて此寶の世に出ん事今更嬉敷侍也是より貴君掘せ給は此上に沼有其邊は如何様の千草也共根にすがる金鈴の如くにして絶さる事は系筋の如し、我金貴君に奉逢誠に優曇華の花見心地是より御暇給り古巢へ歸り度願侍る也と申上ければ大學殿被仰候には貴女の申處逸々胸中に留れり満足此上無く然は貴女の心任に可致と蒙仰其儘形失しと也夫より差路の御船濱傳御通り被成候處蝦夷壹兩人通り合大學殿御船數多の人數見る否大に驚皆々逃去暫く神居泊りに居候と申合候故今以御着の處神居泊りと其名殘候イノコ御答申上候處は則金の云也夫より元成故今以此所涌元と而大學殿始家中並に掘子の者不殘陸に相上り毛無嶽に居城を築是今の荒神堂の掘をゆうなり夫より段々掘子共に相觸懸り候處何れを掘候ても金涌崩候様に澤山有之候山扱毛無嶽掘候年數凡拾三年建保五年迄此所に御仕居被成候て金御爲

堀被成候夫より出し丸山の裾野赤淵の堆左は大川右は深澤飛鳥も難翔處故則夫を御見立城郭に被成候尤山城に其時荒木外記殿を此所に御殘し被置候故に今以毛無獄の下裾野南に當り惣名外記の山等古來より唱候扱大學殿には掘子者共の方へ御手配被成右爲見附家老鷲尾吉右衛門殿を基磐坂の邊へ被遣候扱又基磐坂と其名残り候謂れ委敷尋ぬるに吉右衛門殿此處に長家を作り掘子の者共に支配被成頃は五月雨降續草木枝葉を交萬鳥聲を一つに而囀り遊ふ吉右衛門殿にも餘り徒然成る儘家中の人て相手ため茶園み則掘子の者の手業を一覽有之其日を被送けると也故に今以此所を基磐坂と相唱候多作殿には是も惣目附として掘子被居候故に今以此所を多作の掘と申觸候扱大學殿には出し丸山に城郭を御構被成候てより則此所菩提寺を建立……大學殿御居城被成城郭の跡は大學の山と一統に唱申候尤も申西の方に當りて城郭の跡相殘候昔は是より大木の松杉杯出柚人此處にて材木等切出し候山今は只小松而已生繁り物淋しく靈山に御座候扱大學殿は此所に城郭を御構被成候てより星霜相移候事三拾餘年然る處當知内に限り山の震動致候事及三年に不止……依て大學殿……天下大平二つには當所爲安全の二社建立……寛元二年甲申六月廿日則……其頃は二社にて今は只一社惣號雷公と尊號崇候也夫より雷動も留り掘子の者共も快商賣いたし候其頃雷公堂の近邊家數千軒も有之故に千軒と相唱候也今千軒と山の名申傳候得共全山の名には無之千家の家數立連候様に成高山故に千軒山と申觸候事候知内山中温泉の山來委敷尋るに其頃は當島に家數人倫迎も不足にて況温泉有共知人稀にて道行人只掘子而已有時掘子の内登人澤邊を駈廻り候處温泉の餘烟諸方に立登り候故如何様斯山中に温泉の出る事名湯に可疑からしと早速立歸り大學殿に右の段申上候處大學殿澁た御悦喜是末世の寶也連寶治元年七月廿五日に藥師堂御建立被成

松前年歷捷徑(寛政十一年頃? 松前廣長)

(元和)六 呈上砂金百兩干官二而封疆金銀山及所上砂金共賜之。

(同)四 金山奉行越山。

(同) 八 西部支麻已麻幾出砂金

(同) 十 東部兩邑各出砂金

(同) 十二 夏東部出砂金。甲戌年(前年)大多出砂金

福山秘府(年歷部卷之五) (安永九年 松前廣長)

(貞享二年) 秋八月、西部述島亞出金石。按、是砂金交石物即應金貨之兆也。
是歲(元祿) 依夷人之虛説而西部波保呂金師等逃來干福藩者凡六十有餘人。

松前東西管闕(天明八年 松前藩)

一、砂金山の事、トカチ、ウンベツ、知内、其後、クンヌイ、エウハリ、此五ヶ所より追々寛永十八年の頃迄は山穿出金有之夫より打絶無之候所元祿十三年より七八ヶ年の内西蝦夷地ハホロヘ貳三千人つゝ金掘參り候所度々破船仕役金出不申殊に雜用多く掛り砂金手取成兼候様相聞へ候故相止め其後又々試み差遣候得共一向取不中趣に付相止め中候金銀山以前は出金有之候得共當時一向無御座候

一、東在に於てシノリに鐵吹仕度段江州西川庄右衛門と申もの天明八年迄にて三拾年以前願達一兩年致見候得共鐵不宜其後又々別人願に付中付候所同様不宜殊に出不足故勘定に合不申候に付相止め中候

一、ユウフツ鉛山の事天明八年より百三拾年以前に山穿候所少々つゝ出候其後又々願の者有之穿候得共鉛不足に付前同斷

一、西在豊部内澤鉛山の事天明八年前山見立穿候て一兩年は少々つゝ出候所出不足に付前同斷

(上記の年代或は數字等に誤謬なきや充分なる注意を要す)

蝦夷記(寶永七年 松宮觀山)

一、蝦夷地には松前家より日本人を措置申されず候先年金掘鷹師など居住仕候得共しやむしやゐん、おにひし等
一亂有之候以後日本人は措置申されず候若措置候得は蝦夷人仕置の障りに成候由

松前蝦夷記（享保二年）

一、先年黄金掘假場所並書付出し申候寫

金山場所東夷地うん別とかち東在郷知り内村杯と申所曾祖父志摩守代能金山御座候右之金山元和年中不殘拜領仕候共己前右金山より出候砂金百枚献上仕候處則右砂金も拜領仕候其後東夷地くんぬいゆうはり杯と申處にも金山御座候處四十一年以前（延寶五年丁己）より掘絶し只今領内金山無之由並金寄せ場所西夷地はほると申所の濱へ寄金御座候て元祿三年より七八年の間金掘二三十人宛指遣砂金百目二百目斗宛出申候へ共米諸色高直金も段々不足に成其上遠方故相止其後洗子領内中金出候場所無之よし

一、右之内東在郷知り内村蕨野と云處古へ金掘申候と申場所所有之道筋より見申候

松前東西管闕（前掲同斷）

一、元文二己年金銀山見立穿登せとして坂倉源次郎下着

一、元文三年二月松平左近將監様より御書付を以被仰付候には金銀稼方の儀引受取計可相勤候由後藤庄三郎へ被仰付候間庄三郎差圖を請坂倉源次郎山稼方取計の積後藤庄三郎へ被仰付候間山稼等可申付旨被仰出同年後藤庄三郎名代の者佐原木藤兵衛福島數右衛門上下四拾六人にて下着所々見分致候得共出來不申相止め申候佐原木藤兵衛當時にて病死致候

蝦夷行記（元文四年 坂倉源次郎）

（括弧内は「蝦夷紀事」より採る）

一、國中東南の方は山多く西北の方は平地あり山は岩石多くして峯嶺するどくきりたてたる如し高山の絶頂多く

は金銀の氣或は硫黃の氣にて焼崩れたり土地に金氣多き事餘國に比類なし七十年前迄は年々砂金をとる事夥敷松前領内は（仙見嶽シリウチ）東蝦夷地にてはクンヌイ、ウンヘツ、ユウハリ、シコツ等をはじめ一場所とても數十里にわたりたる場所有て廣大なる事ともなり西はハホロとて是は海より上る砂金也惣て餘國より出る砂金は金山より流出する砂金にて佐州とても西三河といふ處より揚る砂金わづかばかりの事なり松前蝦夷地の事は山川は云に及ばず原野とても砂金あり敢て金山より流れ出るにあらず土地一面に生ずる所の砂金なり然共土地一様に生る其根源の金氣あるべき事ゆへ是を吟味せし處にクンヌイ砂金場の河源に金山あり其證據相糺し現に見極たり此地砂金を取事をしりて金氣の蔓を追て窟中へいる事をしらず之により以前より金山を掘と云事はなし今稀に見るに掘たるあとなきにも非れども砂金を見かけて掘たるにて金石を目當に掘たるにてはなし夫故銀山、銅山等は猶更見知たるものともなく唯打すたりてあるばかりなり此地銀遺ひなし金遺ひも小判の通用は近き頃より仕はしめたと見へて今に砂金遺ひの名目なり

慶長

小判壹兩に

金七匁貳分

金壹匁に

錢六百文

右金壹匁と云事則砂金遺の遺意なり

一、アツケシの手前クスリが嶽の麓に金山ありてこがね山といふならはせり朝日輝く時遠く是を望めば金光ありて商船これを目當とするといへり此邊トカチと云處は砂金山ありて以前もとりたる事あるなれば金山あるべき事也然どもこがね山遠望すれば金色に光ると云事はおぼつかなし金山は金色に光るものにてはなし夜金銀の氣を知ると云ふ事は光り物の如くに見ゆる事也是は佐州金山に度々ある事にて仙見ヶ嶽にても見し事なり金色に光るといへるは金銀山にはあらず銅山なるべし

一、砂金は東蝦夷地に多し七十年前以前は松前より砂金とり一萬人程入込とりたるとなり金掘やしきとて今にクンヌイにありシヤグシヤキンが一亂より相止み蝦夷へ入込事禁制なるゆへ其後再興するものなし今とても以前の如くにせばおびたゞしく可出来なりシヤグシヤキンはシビシヤリと云處の蝦夷にて剛強者なる故東西手近き蝦夷共を抜き下につけ松前へ敵せしなり征伐延引せし内に勢強大になり三年にわたりて戮せられたり元文元年辰年迄七十年なり惣して東蝦夷は剛強にしてやゝもすれば松前の令を蔑にせりキイタツフ、アツケシ、クスリのあたりは別てとりあつかひむつかしきとなり去々年もキイタツフにやかましき事ありて去年は商船行ことやめられたり

一、ハホロ西海にて四十里の砂濱也海より砂金あがる事是も餘國に比類なき事なり此濱西面に海をうけたる地ゆへ春夏東南の風には波あれなくして秋冬に至り西風のおれには大洋より波濤を押上るゆへ此時海底の砂金を陸へうち揚るなり春夏とても大おれの翌日は砂濱一帯黄色ありと云り……此ハホロ極寒の地にて中々住居なるべき地にあらず草木魚鼈迄すくなきゆへ蝦夷たにも住せず前々砂金とりに冬ごもりせしものありけれども多くは寒氣にたへず死せり死せざるものも松前へ歸りては病者となりて廢人になりしとなり

北海 隨筆（元文四年 坂倉源次郎）

砂金を取る運上、領主へ献ずる所一箇月一人まへ砂金一匁づゝなり。一匁の運上いさゝかなる事なれども數百人より納むる所、その取集る日は、役所に澁紙四五枚しきて砂金を取集めしむる内には、山の如く集りけるとなり。御領主へ納る所の砂金は、三十歩の一にして、此砂金一國の利となることあげて言ふべからず

松 前 志（天明元年）（卷之一・九・十）

シロカネ 即チ銀ナリ寛永八年西部アカ、ミヨリ始テ出ナリ近年西部トヨヘナイノ鉛山ヨリ少シク出クレト利潤

ナキニヨツテ自カラ斷絶セルカ如シ

クロカネ 即チ鐵ナリ東部シノリ海邊ニ鐵アリ故ニ湯ノ川海濱鐵砂多シ……又藻鹽草ニヨレハマカネハ鐵ノ事ナリトモ金ノ事ナリトモ云ヘル兩説アリ

ナマリ 即チ鉛ナリ正徳年中西部エサシ笹山ヨリ出タリ明和年中西部トヨベナイ東部夷地ユウラツフヨリ出タリ然トモ其利潤ナキニヨツテ是亦スタリ管子ニ山上有鉛其下有銀山上有銀其下有丹云々

コカネ 即チ黄金ナリ古ハ蝦夷地諸山ヨリ出タリ元祖開國已來溪雲公第七世ノ代元和三年始テ東部大澤ヨリ黄金ヲ出セリ同六年臺徳君ヨリ境内ノ金山ヲ殘リナク賜ハリテ寛永十四五年ノコロマテ金山猶盛ナリシカイツシ

カ金銀斷絶セリ……西部ハポロ海岸ノ砂金ハ元祿ノコロマテニ微シク出ケレト是亦幾程ナクスタレタリ彼ノ地西北ニ向ヘルトコロニテ山峻シク海アラク仲夏ヨリ初秋ニイタリテモ高浪スサマシケレハ海底ノ金ヲ砂浪ト共ニ打揚ルヨシ語り傳フ然レトモ實ハシカラス凡物重キ事金ニ勝ルモノナシ何ソ海底ノ砂金ヲ浪ノ打揚ルコトア

ランヤハポロ海濱巖壁峙チ大波高浪其崖ヲ打洗フテ其浪岩幘ヲ引チラスニヨツテ自然ト細流ヨリ砂金ノ顯ハルルヲ其砂ト共ニユリアケ金ヲ撰ヒ採タルヘシ……夷地ノ金多ク砂金ニシテ山金稀ナリ山金ハ即チ金師ノ所謂ヨウビナリ貞享二年西部夷地ソウヤヨリ金石ヲ出セシコトアリコレ砂金ノ石ニ交リタルナリ爾ヨリ後元文二年東都金坐後藤庄三郎カ徒坂倉源次郎ナン一カ辱クモ奉_ニ冥命_ヲ此地ニ到リケレト金銀出サリケレハ空ク歸府セリ近コロ明和年中又金山門堀ト號シ御小人目附三人ヲ初トシ山城屋安右衛門ナント到着シテ東部クンヌイ近邊諸山ヲ掘シメラレケレトモ遂ニ金銀ヲ得スシテ歸府セルナリ……蝦夷此物ヲシウンガネト云ヒ銀ヲケデンカネト云ヘリ又小判ヲシヤモタカラト云フ松前地方近邊ノ蝦夷ハ金ヲコンカネベ銀ヲシロシカネベト云ヘリ

ヤノネイシ (浪華ニテ劍石トモ云ヨシ)

ケンイシ 是即チ石英ナリ東部クンスイ邊ヨリ出ツ

タキイシ 此物東部クスリヨリ出ツ黒クシテナメラカナリモユルコト薪ノ如シ大和本草ニ所載石炭ノルイナリ

ハラウタイシ 自然生ノ石垣石ナリ其色應青色ニシテ奇云ヘカラス西部上國ヨリ東方原歌ノ名産ナリ又西部クマ

イシノ邊ニ硯石アリトイフ

ユハウ並エンセウ 東部夷地エサン……西部夷地イワナイ山ニ多シ……又火消多シ他國ノ産ニ異ラス

臭^{クサ}水^{ミヅ} 東部支利宇知海邊石腦油アリ和名クサウヅト云フ又東部エサンニアリ又カヤベ邊ニアリトキケリ(ク

サウヅとは石油である)

ミヤウバン 東部夷地エサンヨリ出ツ

タウノツチ 即鉛粉或ハ胡粉ト云ヒ白粉ト云フエサンヨリ出ツ

赤蝦夷風説考上卷(天明三年 工藤平助)

附録 蝦夷に東西の區別ある事

一、松前城下より東丑寅に當り淺間^{セシマ}と申大山あり近邊にすぐれたる大山にて古來より金銀多く出候山松前家の御先祖彼地を被渡候て諸國より入こみ居候金掘共不殘追拂候は右掘跡に高さ數十丈にて屏風の如く切立候處有之是を切通と云右山つゞき東西の山々不殘みよし掘の跡有之候みよしとは砂金の事也

一、右淺間の山つゞき城下より九里程有之處に尻内と申温泉あり此所は松前家御先祖六代前みよし金多く出る凡數十萬兩の金を掘出す依て其筋より諸家中へ歳暮の祝儀として砂金十匁宛賜り候山今に至り候ても其例を以歳末の祝儀に青銅十匁を賜り候儀は此古格の残り候事の由

一、松前城下より東廿五里程先箱館と申所諸國より廻船入込候所にて右の所より東に多山と申大山有是は銅山に

て硫黄明礬の類も出候處也此所箱館の町人白鳥新十郎と申者先年より商賣掘いたし近年相休候

一、ゑさんより三十里先ユウラツプと申所にクンヌイと申川あり此川濱邊より三里ほど上にみよし金あり右の所先年松前家よりみよし堀有之金は甚多く候へ共致方を不存候に付多くとれ不申相休候右の所實曆年中江戸町人山城や安右工門と申者願ひ達御小人日付矢澤友藏殿宇佐美仁右工門殿兩人被仰付右場所見分被致候得ども子細有之其場所は相除き候此所至て砂金多く此川上にユウハリと申大山あり是金山也シツコユウハリと申候右の所よりクンヌイ並西蝦夷せたなひと申所と兩方へ川流れ出る

一、クンヌイより東にサルト申所有之此所松前城下より百五十里程有之候此所に古來は金掘ども數千人入込候山家數千軒立候跡有之候

一、夫より東にエリモト申所古來金掘諸國より入込候處蝦夷蜂起の節盜掘の者百人松前家より仕置有之及殺害候是を百人濱と申候此所金甚多く候山中傳候夫より先段々山も平らかにて東を渡り口近しとぞ此處アツケシに近し赤蝦夷は此アツケシと申所へ渡る山

西 蝦 夷 の 事

一、松前城下より三里程有之赤神と申所鉛山あり右の所より西にキョベと申所これは銅出る

一、夫より六十里先にスツキと申所古來金掘多く入候所にて今に其跡あり

一、城下より百五十里先石狩と申所大川有此川筋七日程上りユウハリ山に近し

一、夫より西百里程有之マシケと申所此濱つゞきにハポロと申所みよし金有先年松前家の家來野村與五右衛門と申もの右用懸りにて罷越候へ共甚不案内にて取兼候是は全く仕方不存故と申事に承り候取方巧者のものに候は
ゝ能手段も付可申山

右は承り候にまかせ記し置所也金山の儀一向不存故慥成事はしれ難し始に申所の交易の工夫第一の入用成故に先其有増成ともしるし置後の考合にするもの也

天明三年正月

(理解の便の爲問題の對象となるべき「附録」の部を先に掲げたり。 南 鐵 藏註)

上卷 赤狄風説之事

……紅毛書を考ふるに、既に享保の頃「ムスコビヤ」の人その國王の下知により、阿蘭陀の「カビタン」同道にて「カムサスカ」より南日本の地方へ吟味に行事見へ……明和八年の漂流「ペンゴロ」も此類の事にて我國の地勢を見んとて、道上巧者なる阿蘭陀人を誘引して「プロシヤ」の者共の乗廻したる事と見ゆる也、右の船を見たる人の物語を聞に、繩をさげて海の深さをはかりたるよし。日本のぐるりの海の浅深を委しくはかり知りたるといふ……中々漂流の體には見えすとぞ。然るに頻りに隱謀あるを申唱ふる事不審の第一なり。……前後の次第にて考ふるに中々軍兵を發して大合戦に及ぶべき事には思はれず。……我考ふるに、日本の金銀多き事を知る故に、何卒交易したき心のある也。……扱通路有手段には様々有べき内、一體の主意は要害第一也。又第二には抜荷の禁制也。此まゝに打捨あらば、抜荷は段々に巧者に成て、何程も出べき也。此等事を考るに表立の交易有之より外にはなし。交易有れば其向の人情も知れ、風土も知る故、夫に向ての手當も有るべし。又其十分をいはゞ蝦夷には金山多き由世の云所也。昔僕の親の友に此事を志して力を盡したるよし。蝦夷の砂金也とて贈りたるを見たり。又松前の人の物語を聞に、松前よりも昔より世話も有て、僕の知る人の親も此役にて蝦夷地金山にかゝりたるよし。昔は芝したの金も多く有之由。今有之所砂金にて、水中にあり、至て惡場にて、出金入用につぐのはず。其外銀山、銅山も有之由なれど、不引合とて掘る事なしと承る。一通りの物語にて慥成ることにては

なし。さも可_レ有かとのみ思ひすごす所也。此一件の考に及ぶ時は、承_レ見届たき事也實證金銀銅有_レ之事ならば、此金銀を掘しめて是を以て「_レロシア」と交易あり、交易の利潤を以て山方に入る程ならば、何程入用掛りても興行可_レ有_レ之事也。……「_レロシア」の日本交易を好むは數十年前よりの趣向と見ゆる故、いか様な事をしても交易すべきの心有と思はる_レ也。如此の次第故かたぐ_レ以奉行を置て支配無_レ之ては禁制しがたき事故此幸便を以日本の富榮へん事を求めるに、兎角蝦夷の出産物を吟味するにしくはなし。蝦夷地の金、銀、銅を以我國の入用の藥種其他國用に可_レ相成_レ程に有_レ之、依_レ之年々異國渡りの銅をはぶき、拔荷制禁の御法令行届者ならば、數十年の内國家の豐なる事掌を指す如くならんかし。惣て國を治るの第一は、是我國の力を厚くするにあり。國の力を厚くするには、とかく外國の寶を我國に入るを第一といふべし。外國の金、銀、銅を我國に入る事は外國人(?)の專一とする所にて其心を用て出精する事ゆえ我國の心掛の引べつ(?)はならぬ骨折也。依_レ之逆も不_レ反事也。扱日本の力を増には蝦夷の金山をひらき、並其出産物を多くするにしくはなし。蝦夷の金山を開く事、昔より山師共の云ふらす所成が入用と出高と相當せず、依_レ之すたれ有所也。然に先に云所の「_レロシア」と交易の事おこらば、この力を以開發有度事也。此開發と交易乃力をかりて、蝦夷の一國を伏從せしめば、金、銀、銅に限らず一切の産物皆我國の用を助くべし。右交易の場所あながち蝦夷にも限るまじ。長崎をはじめ惣て要害よき湊に引請て宜事也。右に申通り日本の力を増事蝦夷にしく事なし。又此ま_レに打捨置て、「カムサスカ」の者共蝦夷地と一所になれば、蝦夷も「_レロシア」の下知に附したがふ故、最早我國の支配は受けまじ。然る上は悔て歸らぬ事也。……扱又前に申所の蝦夷の金山掘方の事は、他の金山と事替りたる子細有、蝦夷地金銀通用無_レ之、只米、酒、鹽、煙草類斗を好む故、入用と中に金銀は費へず、只山内働きの人の給分入用斗にて是とても地付の蝦夷を交て働くゆへ、給分は皆俵物にて正金はいらぬ見込也。夫故入用多く掛りても掘出高を以

交易金の助けと成べき也。

三國通覽補遺卷上

按スルニ蝦夷地ノ金山掘方ノ事ハ費用失脚他邦ノ金山ト事カハリタル子細アレハ取懸リサヘシタラハ念ナク成就スヘキ事ナリ其ノ謂レハ蝦夷地ハ金銀寶貨ノ通用ナキ土地ニテ米穀酒鹽煙草器物反物古着ノ類ノミヲ好ム故人是等ノ入用ニ金銀ヲ費スニ及ハス只山内働ノ者本邦人ノ分ハカリ給金ヲ與フヘシソレトテモ地附ノ夷ノ利根ナル者ヲ交ヘ働セハ給金又減スヘシ斯ノ如ク大抵國産ニテ事濟テ正金多ク費ヘヌ見込ナリ且又掘リ得ル所ノ金銀銅ヲ以テオロシヤト交易スルニ於テハ百兩ノ高ニテ千兩ノ品ヲ易ヘ得ヘシ此利ヲ以テ掘方ノ助力トセハイヨク心ヤスキ事ナルヘシ只々努力スヘシ本邦ノ國益此一事ニ於テ他術アルヘカラズ何レニモ慥ニ穿鑿シテ糺明シタキ者ハ蝦夷地ノ產物金銀トオロシヤ人ノ振ル廻ヒトナリ但シ拔荷禁制ノ一件ハ先輩未發ノ新按ナリ何レニモ蝦夷地ヘ鑽臺^{ドリトウ}置キ奉行ヲ遣シテ支配セシムルニアラスンハオロシヤ手筋拔荷禁制ハ決シテ成リ難キ事ナリ此ノ書ノ肝要ノ評議此一件ニ止リヌ忽諸スルコト勿レ。

東遊記(天明四年)

先年シリウチ金とて多く金出たり、ハホロ、ユウラツフ、クンヌイなどいふ所金多く出るよし、今は國禁にて掘る者なし、銀山、銅山、鉛山城下より西の在々にありて、昔は蝦夷地まで數多金ほり入込けるよし、今に其跡多し、その道を知りたる人、くはしくもとめなば、何程の國益起るべきもはかり難きは此地なり。

東遊雜記(天明八年 古河古松軒)

松前知内浦の北方に仙見ヶ嶽と稱せる深山あり、此邊は蝦夷地の界なりと言へども、遠見せる所全く蝦夷地也。此山には黄金の出し事ありて、寛文年中の比秋田及南部津輕の金穿此山に來りて黄金を掘しに、次第々々に

繁茂し、蝦夷人數多爰に集りて蚌の巢の如く穴を穿、數多の黄金を知内箱館の浦々に出して諸品に交易し、繁昌月に増し日に増て家居の出來し事凡千軒に及びし故に、初は無名の山なりしに島人千軒山と稱せし故に、松前侯より制度有て松前侯の山にし給わんと有りしかども大勢を頼としなか／＼松前侯の下知に應ぜず、却て不法のはたらきあるに依て松前侯より人數をさしむけられこと／＼く燒討にし給ふ……右の千軒山は松前侯より今は仙見ヶ嶽と改め書く。

今世には如何の事にや千軒山より黄金は出ず、浦人の説には此上に於數千人の蝦夷人を殺害せし給ひし故に、山神怒て黄金の出る筋をふさぎ給ふと言。斯る愚俗の妄説多き物也、察して知るべし。松前の寺院には此山より穿出せし黄金を以て鑄し黄金佛あり、至て上品の黄金なりとなり。

三國通覽抄(天明五年 林子平)

「其國ニ第一金山甚多シ然レトモ掘事ヲ不知空ク埋レテアル也銀山銅山亦然リ又砂金ノ出ル地多シ。クンヌイ。ウンヘツ。ユウハリ。シコツ。ハポロ等也此砂金河水ニ流レ出ル耳ニ非ス砂金ノアル地ハ十里二十里モ土地一面ニ生ルス也ハポロノ砂金ハ海底ヨリ打上ルト覺ヘテ西北風ノ大荒シクル後ハ海濱四十里ノ間一帯金色ヲナスト云リ是等ノ金銀ヲ不取シテ空ク捨置事可惜事也竊ニ憶フ今取スンハ後世必莫斯哥未亞取ヘシ莫斯哥未亞既ニ是ヲ取ハ臍ヲ嚙トモ遅カルヘキ ○或説ニ砂金ヲ取ル事ヲ欲シテ。ハポロニ冬コモリナトスレハ極寒ニ擊レテ必死スルトヒ不死トモ病身癡人トナル故行人ナント云傳フ小子按ニ其實事ナラハ無術無謀ノ甚キナリ。

ハポロニテ寒氣ノ爲ニ人死スルナラハ。ハポロヨリ北ノ方ノ人ハ何ヲ以テカ活ル事ヲ得ヘキヤ其寒氣ニ人死スルト云ハ暖地ノ人強寒ノ地ニ入テ預メ寒氣ヲ防カサル故也防ク術アラハ何ソ死ト云事カアラン可思

蝦夷草紙 下卷（寛政二年 最上徳内）

「箱館屬村大森石崎其他諸所に銅山多し又東蝦夷シヘツの奥に銅山ありウラカハに採鑛の跡あり竊々夜話云浦川場所ホロヘツ川二里上シユマンと云ふ地探金の古蹟あり 西蝦夷シイテの奥ヲホロ（ヲホロ？ヲボユ？）嶽に最上品の鉛を出せり其地深山多ければ産鑛の地あるへけれども探索に及ばざれば知る事を得ざるなり

物産

金山 松前所在島ノ中センケン山クンヌイ山ハホロ山等書ニ載タレトモ皆芝下金ト云モノテ土砂ノ中ニ交リタル砂金ナリ人ラハナシ又ウラカハト云處ノ金山跡アリ是ハ掘タラバ出ベキト思ハル、ナリ其外エトロフ

島ラツコ島等アリ深山ニ有ベキカ未開ノ大國ナレバ明細ニ探索ニ及ビ難シ時ヲ得テ求ムベシ

銀山 古來ヨリ銀山ノ沙汰ハナシカツクミ山ユウラツフ山ニアリ西蝦夷地ハ深山多シ因テ奥ユカシクレドモ予未到ラザレバ風説ハ舉難シ

銅山 東蝦夷地シベツノ奥山ニアリ又函館ノ在ノ山ニアリ

鐵山 函館在ノ大森村石崎村等ニアリ其外所々ニ多シ

鉛山 見市村ノ奥ヲボユ嶽最上タリト云先年江指村ノ者掘タル時ニ一ヶ年ニ三百箇許出來タリ其外赤神村江指村ニモ有ナリ

黄銅 マツノイヲ、ストロフト云島ニアリ此金日本ニテ未見生レナガラ金色ナル銅ニテ眞鍮ノ柔カナル様ナリト赤人涉海シテ予ニ委細ニ物語セリ

餘糧 エトロフ島シヨツチキヤト云處ニアリ貯置テ時ニ糧ニ用ヒ食事ス色白ク餅ノ如クニテ味ヒ淡ク此島ニ渡

海セシ時友船ニ別レ米味噌モナク草ノ根ヲ焚テ此土ヲ入レ食事トセシニ甚輕クタベヨキナリ

碗 青 シコタン島ヨリ採來ル石ニテ珍ラシキ品ナルニ付テ日梨者衆評究ヲ佛頭香ト名ク瀬戸物ヲ燒ニ用ユル土

器ノ模様ヲ畫ク繪ノ具ナリト云

硯石 函館村ノ先石崎村シロイ濱ト云處ニ一圓ニ有リ又此山陰スルイ川ト云川筋ニアリ江戸細工人形ニ彫セテ

予所持スル者ナリ日本ヘ運送シ易シ

鐘乳石 西蝦夷地大田山ノ崎地藏安置ノ巖窟ニアリト云リ

石炭 クナシリ島場所ノ内ヘツシヤフ村ニアリ

溫泉 シリウチ湯ノ川乙部見市平田内湯ノ臺大澤並カツクミ鹿部留ノ湯エサン山ノ湯シベツヤ、キ其外島々ニ

アリ

明 礬 エサンニ澤山アリ製法未タ知ラズ因テ土人捨置ナリ

北邊禁秘錄(寛政七年 原書最上徳内 本田利明加筆)

一、寛文巳酉中迄は蝦夷地え金掘共凡二萬人餘入込砂金或は岩窟を掘り甚だ繁昌仕候處羽州の者にして庄太夫と申者夷人の聲に相成蝦夷地一圓に所領と可仕謀計仕男シヤムシヤインといふ夷人大將にして二三千人徒黨仕日本商船八十艘餘亂奪いたし日本人の類悉く殺害いたし候に付松前家より公儀え注進仕候處松前八左衛門殿之被仰付蝦夷地取鎮に罷越相治候其騒動は元來右庄太夫より事起候に付以來他國者獵りに蝦夷地え不可入旨の御下知有之候歟今に至ても兎角仕候儀は此例を引出旅人一尙蝦夷地え容さる被仰渡も有之抔と申出候

谷元旦蝦夷紀行 下(寛政十一年)

(八月) 八日……ユウラツフ山は銅鑛を出すよし……十三日……釜屋村に至る濱通海際の岩白石の處悉くたて

岩山にて海へ押出たる岩嘴上に所有銅箔石英自然銅鑛の類有採山を越て濱に下る岩山に崖壁に小水晶銅箔石多しヤクネ村より鹽首の崎に至る。

第二次發展時代

當代は本嶋に於ける斯業が前期の主として民間の自主的活動に基く漸進的なりしことを其發展特徴とせるに對し「主として官、民協力的活動に基く急進的なりし」ことを其發展特徴として觀ることに於いて斯業發展の當代の姿を把握し得ることを叙述するものである。

一 當代に於ける本嶋鑛業成立過程の梗概

當代は安政元年より慶應三年に至る僅か十四箇年間であるが本嶋鑛業として第一次的發展時代以降初めて再興したる事業である。即ち第一次的發展時代去りて以後は幕府直轄時代委員を派してシビチャリ銀山を試掘せしことあり、又前代即ち松前藩直轄時代に於いて天保十三年箱館の商某初めてエサンの硫黄を開掘、又弘化三年函館の商某又々同所の硫黄を掘採し嘉永元年に至りて廢する等二、三の例を數ふるに過ぎずして一般の趨勢は此間甚だ不振の状態に置かれて來た。然るに之が當代に入るに及ぶや或は復活し或は新興せらるゝありて前代迄殆ど金屬鑛のみの採鑛も當代に入れば石炭・石油・硫黄其他非金屬的鑛物も採掘せらるゝに至つたのである。而して之が企業に當る者たる従前の全く民間のみの事業たりしに對し、當代の夫は或は官營なる場合あり、或は民營なる場合あり、又民間其ものゝ中にも以前の如き殆ど日本本地人たりしに對し當代の場合には日本本地人の外に在住の個人あり、或は村民等の場合もあり、而も其採鑛技術も文久元年の利別川の水銀を以て砂金を採取せし如き或はユーラツプ鉛鑛を火藥を使用して破碎せし如き我國としてさへ最初の試であつた。而して當代の採鑛業者、産鑛の種類及び其地名等を年代順的に見んとするに次の如く安政二年より始まり、而も其採掘者、企業者何れも皆和

人であり島内の東西南北和内地蝦夷地を問はず、金屬・非金屬を撰ばず採掘せられたのである。

安政二年〔エサン村民・エサン硫黄〕〔ネクナイ^{シリキシ}ナイ^{シリキシ}支村^{シリキシ}村民。トドホツケ^{カヤ}銀・銅〕〔箱館大町の喜左工

門川波の精進川、鉛〕〔箱館奉行コブイ^{シリキシ}海邊、鐵砂〕。〔箱館奉行フルベ山^{カヤ}黄土石黄〕〔箱館

奉行川波川砥石。川波硯石〕。〔尾札部の與五右工門、尾札部燈石〕

同 三年〔箱館奉行川波金・銅。市ノ渡銅・鉛〕〔三月南部銅山岩尾勝右工門・石川仁吉市ノ渡鉛・砂鉛〕〔箱

館商前年エサン村民の分引受エサン硫黄〕〔登別村民登別・樽前硫黄〕〔幕府オソツナイ^{クシ}石炭〕

同 四年〔箱館奉行ユーラツプ銀鉛〕〔箱館奉行釧路白糠石炭。熊石―壽都を檢す〕〔根部田村三次郎トド

ホツケ銀〕

同 六年〔箱館奉行ユーラツプ銀・鉛。利別川砂金〕〔南部銅山石川仁吉發見、五月佐渡金工洗淘クンヌイ山

砂金〕〔會津藩シレトコ山^{シヤ}硫黄〕

萬延元年〔松前藩赤神村鉛〕〔箱館奉行茅沼^{岩内}石炭〕

文久元年〔幕府川波・市ノ渡・ユーラツプ諸鑛山。利別川砂金。ウシベツ^{茅沼}炭^鑛〕。山越内油井〕〔場所請負

人佐藤仁左工門岩内石炭。岩雄登^{ナイワ}硫黄〕

同 二年〔幕府岩内石炭〕

元治元年〔箱館奉行茅沼石炭〕〔コブイ村民コブイ硫黄〕 此頃〔播州の人高砂屋三郎兵衛駒嶽硫黄〕

慶應三年 箱館奉行所吏員岩内茅沼の石炭を發見之を幕府に獻すと「北海道志」^{卷之二十四}に記さるゝも「北海道

史第一」には前記の如く既に萬延元年箱館奉行之を試掘すとある如何なる相違にや。其他當代幕府は茂岩

銅山^{古字}〔場所〕・河白^{高島}〔場所〕の金銅山、又箱館奉行所員石狩在勤荒井金助は西蝦夷地厚田濱石油井、空知の石

炭等を發見す。

當代本島採鑛の業以上の如く、或は再興に或は新興を見るに至りしとは雖其一般の趨勢は尙依然として従前に續きて多く、試掘の程度に止まり、而も其中には或は經營費の多額を要する所より、或は販路未だ開けざる所より、或は品質不良等を原因として廢坑に歸したるもの尠からず斯くして官民銳意の努力も多くは見るべき結果も得る所なくして遂に次の時代へと移行したるものである。然らば以上の過程は當代として如何なる特徴を形成せしめたるか。

二 額代に於ける本嶋鑛業の特徴

本嶋鑛業は第一次松前藩本嶋直轄時代一時隆盛を見しと雖其後久しく振興なくして經過したりと雖當代に入るや再び其勃興を見るに至つた。然し乍ら前者の發展と後者の夫とは其發展動機・様式・發展鑛産種目等に於て自から差異無き能はず。即ち前者に在りては、其末期幕府の調査的活動を除きては總べて民間の自主的活動に基く發展動機であり、而も之は漸進的發展形態を出現し、其發展鑛産種目は殆ど金屬的であり、其業者も先づ日本本地人と云ふべきであつた。然るに當代に於ける夫は主として官・民協力の活動に基く發展動機であり、而も之は急進的發展形態を出現し、其發展鑛産種目は單に金屬鑛のみに止まらず非金屬鑛にも亘り、而も之に活動せる民間も當代に入りては日本本地人のみを以て主とせず本島在住民も之に参加を見るに至つた。今左に之が具體的狀態を窺ふこととする。

先づ幕府としては安政元年箱館奉行堀織部及び村垣與三郎等本島に之が着目調査を進めた。其意見書なる「松前並蝦夷地物體見分仕候見込之趣大意申上候書付」に依れば金屬・非金屬鑛の何れをも本島には有望なる旨を報し（蝦夷開墾志天）

金銀銅鐵鉛錫の氣を含候色石（金銀其外鑛山の見本にいたし候石を色石と唱申候）山合谷間に流出いたし居候處儘有之候程の義鐵砂に至り候ては海岸又は川端等五六里或は二三里程も打續敷詰候場處數多有之（厚さ二三寸より尺餘にも及候處も相見得申候）其外瀬戸物に可相成候土同斷藥土ゴスの類亦石炭並同油或は藥種類石質數品委細別帳に申上候様可仕追々取調罷在候

としてゐる。然らば當代本嶋探鑛の地方的分布状態は如何といふに之も以前の初期時代と同様和内地、蝦夷地を問はず主として福山城下を中心として本嶋東側地方に多きを占め、加ふるに間々西側地方或は内陸地方にも及びし如く思はるゝが今當代の初期箱館奉行所の調査に係る「蝦夷地御開拓請取調書」（一名「安政度蝦夷地經營始末」）の報告に依れば東側地方に在りては先づ箱館附六箇場所であるが、此處にては金屬性鑛物としては金・銀・銅・鐵又非金屬性鑛物としては砥石・硯石・燧石・黃土石黃・硫黃の産出あり、殊に川波にては砥石・硯石材の産地にして其量も富めるが如く、又其他東蝦夷地としてはユウラツプの鉛山有望であり、クンヌイの砂金は産出少量なるも金質良好なるを認められ、タルマイ山はエサンと相並びて硫黃の場所であり、クスリ（釧路）・シラヌカよりは良質の石炭を出す。又西蝦夷地地方にては岩内の硫黃及びサカツキ・サンナイの兩地は共に古字場所の金銀鑛地と云はれ（松浦武四郎西蝦夷地誌第三編古字領）、又内陸地方にては「市ノ渡」にて銅鉛を試掘申鉛は漸次産出を増加しつゝあり、斯くてクンヌイの砂金は佐渡の金掘工夫を招徠して探掘せしめ居るも産額未だ見るに足らず、硫黃はタルマイ山にては村民一手に請取り、又其他相共に何れも箱館産物會所の買上とし、更に之を大阪・江戸會所へ轉送し、或は船手其他の希望者へ賣捌き、百石（四千貫）に付き純益百兩、又石炭は外國軍艦に於いて之を必要とし居るを以てクスリ・シラヌカより採掘し、箱館表へ廻送貯藏の上外國人へ賣却するが此純益も一俵（十六貫）に付約錢三百文といふ相應の有利さに展開しつゝあり。砥石材は販路未だ調査中にて在

り、硯石は元來態々荷拵へて日本本地迄移出する迄にも至るを得ず、箱館産物會所附御用達等をして其賣捌をなさしめ居り、燧石黄土・石黃等は採掘者勞賃、運搬費其他諸生産費を差引けば利無きを以て之を中止せりと。即ち同書に曰く

一、箱館附六ヶ場所内金銀銅鑛並砥石燧石黄土石黃硫黃等取開方之義安政三辰年中竹内下野守見分之上申上右之内川汲山銅鐵試掘取掛猶又近在市之渡銅鉛山試掘之義同年申上之上取掛候處追々鉛出方相進み午年中盛山仕候義御届申上置候義に而引續稼方いたし罷在候最初取掛候川汲之方は未見込間數迄穿入不申候へ共差向外國に御入用多分に付御益金有餘出來候迄暫く手心に而相休罷在候且燧石黄土石黃等は掘手間運賃諸掛等差引格別の御益無之に付試而已相止申候

一、東蝦夷地ユウラツフ鉛山之義未年中試掘取掛候處格別出方宜引續稼方致し並同所内クヌイ砂金山申年中より掘方取掛未出高は少分に候へ共金性並吹上分附等宜去西年中純金四十五匁差上彌出金相進候上は出高之内一割は上納殘之分は相當之双替を以御買上相願右を以山方取開少分に而も御益有之候はゞ蝦夷地諸産物御入用え差加候積伺之通被仰渡佐州表より職人呼下當時専ら稼方致居候へ共未だ多分之出方には至り不申候

一、硫黃は六ヶ場所内エサン並西蝦夷地之内イワナイ等に而穿候取製法稼方願へ元申付東蝦夷地之内クルマイに而は在住之もの之内一手に而引請取開右いづれも産物會所に而買上大阪江戸會所へ相廻其餘箱館表におもても舟手其外望之もの江賣捌百石目（四千貫目）に付買上代差引元金百兩内外御益に相成申候右之外近在駒ヶ嶽にも硫黃生産致し是又稼方願人有之申付置候處未手配行届兼多分之出方に相成不申右等何れも稼方望之者へ爲引請置御買上之上捌方致候積に有之

一、砥石並硯材石等六ヶ場所内川汲に相應之品有之追々切出候へども砥石之義は未賣捌方引合治定不仕取調中

に有之硯石は素より他國迄荷物に致し積出候程之義にも至兼箱館產物會所附用達共へ申付爲賣捌申候

一、石炭は外國軍艦必要に而御條約之趣等も御座候品に付蝦夷地之内出產之場所々々巧者之もの差遣し見分爲致候處東地クスリ領シラヌカ出產之分性合宜候に付追々職人共相廻し穿取箱館表え積廻し貯置外國人へ賣渡申候右は十六貫目一俵に付元代諸掛り差引凡錢三百文程づゝ御益相成候に付年々賣渡高に應じ多少は有之候へ共相應御益相成申候

と。又當代採鑛の種類は其金屬性に在りては金及砂金・銀・銅・鐵・鉛、又其非金屬性に在りては硫黃・石炭・石油・砥石・硯石・黄土石黃・燧石等となる。以上は當代發展の初期の状態なるも以後は尙之が發展が爲された今此等の諸鑛採掘の經過に就きて以下更に細説を行ふこととする。

〔金及砂金〕安政三年箱館奉行は南部藩に命じ鑛山熟練者を派遣せしめ同藩が岩尾勝右工門を以てせし時勝右工門川波金山をも見込む。同六年クンヌイ山砂金を南部銅山石川仁吉發見五月開發佐渡金工洗淘し一人一日採取量八九分より一匁。又此頃西蝦夷地古宇場所内サカツキ及びサンナイより金銀鑛山出づとせられ殊にサンナイよりは此鑛多しと云はる、松浦武四郎は其著「西蝦夷日誌第三編」に次の如く記す。

「シリクシナイ川小カハルシヤ家新道此所え下る濱に出てサカツキ……(中略)……名義金銀鑛有の義也此處に鉛鑛有故に號く」(西蝦夷日誌(フルウ領)第三編)

「サネナイ本名サンナイにて下る義也兩山峻敷水急也」此川金銀鑛多しと(西蝦夷日誌第三編フルウ領)又幕府は文久三年五月前年聘せし米人地質學者ブレイク並パンペリー William Blake, Raphael Bumpelly, 學生通詞等と共にカツクミ・クンヌイ兩地金鑛を検せしめ利別川上流に於て水銀を用ひ砂金の採取を試む。

〔銀〕安政二年ネタナイ(シリキシナイ支郷)村民ト、ホツケ銀鑛開發、箱館奉行所は「フルベ」「カククミ」

山松大澤（「北海道志」(卷之二十四)にはカヤベに屬すとあり)等の銀鑛試掘。同四年石川仁吉ユーラツツ山銀鑛發掘ありしも後廢す。同六年同上鑛山再び興發す。

銅 安政二年ネタナイ村民三郎ト、ホツケ山銅鑛を開發し後廢す。又年代は不詳なるも幕府茂岩(フルツ場所)並に白金(タカシマ場所)兩銅山を調査す。

鐵 安政二年小武井海岸鐵砂を箱館奉行竹内保徳査檢し、文久二年五月幕府米國地質學者前記ブレイク及びパンペリーの兩人をして更に同所鐵鑛を點檢せしむ。

鉛 安政二年箱館大町の民喜左工門河波精進川の鉛鑛の開發をなし後廢す。同三年三月幕府一ノ渡鉛鑛を採掘するに砂鉛五分銀二分を含有するものを得たり、其發見者南部銅山岩尾勝右工門、然るに後亦廢す。又ユーラツツ山鉛鑛を石川仁吉更に發見するに及び幕府は曩に同山の銀鑛を開發せしも其利少きを以て之を廢し、同四年四月より同山の探鉛に着手、世俗賽の目鉛と名付け極めて上品にして砂鉛七分付銀紋四分垂、其探鑛方法として幕府はブレイク等をして火藥を以て鉛岩の破碎を爲す。これ前記砂金採取に水銀を使用したると共に本邦鑛業界としても最初の試であつたのである。

硫黃 嘉永元年に至りて廢止せられし、惠山(シリキシナイ村)の硫黃を安政二年更に村民佐吉之を請負ひ探掘す。同三年箱館の商某請うて之を採掘せしが其坑夫二十人乃至三十二人、毎月の製出量凡そ百石餘なりといふ。一般硫黃の販路未だ開けざるにより箱館産物會所は同五年精製硫黃百石に付き金百兩を以て買ひ上げ諸方に轉賣し、其發展を圖る所があつた。又同年三月箱館奉行所屬吏鈴木尙太郎イワナイの岩雄登硫黃を發見、萬延元年(安政七年)十二月奉行竹内下野守より仁左工門探掘の命を受け文久元年(萬延二年)五里の山道を開鑿し、同年秋より試掘、箱館まで百石金八拾兩を以て産物會所へ上納の筈の處積船江差にて破船す。然るに硫黃は無事

同所へ陸揚翠春箱館へ廻送し得た。爾後年々採掘一箇年其量五百石を下らず同所へ納せしも明治の維新に入り同二年請負人の廢止と共に休山となる。

請負人履歴 各請負場所調（佐藤仁左工門履歴）一岩雄登硫黄安政七年奉行竹内下野守ヨリ仁左工門ニ切開仰付ラレ萬延二年山中五里ヲ開キ同年秋ヨリ硫黄試掘製ノ上其節御沙汰ノ通り函館迄百石金八十兩ヲ以テ同所産物會所へ上納ノ筈ヲ運送ノ處九月右船江差ニ而破損幸ニ硫黄ハ無事陸上ケ同處ニ圍ヒ翠春函館へ廻送セリ爾後年々掘取り、明治元年迄八ヶ年遲滯ナク製造函館へ上納セリ同年冬賊徒渡島ニ上陸翌二年請負人ヲ廢シ竟外ナガラ休山云々。

翻つて安政六年會津藩はイタシベツニ（シヤリのシレトコ山）硫黄を開採慶應三年迄繼續す。文久元年物價騰貴の爲硫黄製造收支償はざるの情勢なるを以て産物會所は從來買ひ上げ來りし百石百圓の價格をば百六十圓に改めて其支持に當つた。今之を前述イワナイの硫黄登産が八十兩なるの記事に對比しなば如何なることを物語れるか、同山硫黄産出の好條件に基くか、夫とも前記記事中の説明に脱漏存せしにもありたるか。斯くして同年七月には「イワナイ」「ポロボツ」「タルマイ」等の硫黄の製出品は箱館産物會所之を買ひ上げ大坂及び江戸會所に廻送し、餘は箱館地方に販賣其發展を圖つた。斯くした官の努力にも拘らず眞實生産の失費尙も嵩みし其故か、夫とも價格引上の前例に鑑み虚偽の中立により不當の利を貪らんとする商人等の奸策に基けるかは得るに證材なしとするも同三年同所買上げ價格を百石二百兩に増額せんことの出願ありしに聽許されず唯年々税金若干、硫黄五十石を納むる者には石數の多寡に關らず採掘を許すの令を出す。元治元年古武井硫黄を其村民發見箱館の商某之を採掘し、慶應二年箱館の藥種商また之を採掘。同三年惠山硫黄は其收支相償はずして採掘を止む。又駒ヶ岳の硫黄は噴火の爲人皆恐れて近づく者無かりしが元治元年後に於いて播州の人高砂屋三郎兵衛採掘に着手したりと

云はる。

〔石炭〕本嶋石炭の供給に就きては從來其採掘無かりしが爲薪水補給を約した神奈川條約にも其附録中箱館港出入の外船に對し、之が供給をなさざる旨を明にし、他の地にては之をなすことを約したのであるが、外國汽船は何れも其補給を要求し、薪炭の伐採も次第に薄らぎ、價格も騰貴しつゝありしを以て箱館奉行は炭山開坑の必要を感じ此旨老中へ伺を立て、先づ安政三年初めて釧路オソツナイ石炭を掘採にかゝりしも後幾何もなくして止む。翌四年七月の日米對話書には尙「石炭は當地に無之、差向渡し難し、追々取出候へば相渡可相成事と存候³⁾」とて此項より外國人への供給を決したるもの、如きも未だ其實現には至らざりしか。然し他方之が採掘としては同年手附栗原善八其役掛となり、江戸より伴ひ來りし採炭夫數名及び人夫と共に釧路場所白糠に至り開坑し、不危燈安全燈四箇も送られ坑内に使用せられた。採掘高は同年六月より翌年四月まで五千九百九十八石八斗なりと云ふも其後の状態詳ならず、文久元年罪人を此坑に送り入墨を施して採炭に使役した。然るに此地の炭質不良にして外國人之を好まざりしを以て元治元年其採炭を廢し新に岩内場所茅沼炭山を開坑することゝなつた。茅沼炭坑の起原に就いては嘉永五、六年頃上方水主五平太なる者薪水を採らんとして同處の澤に入りし際之を發見せしに係るといふ説と又其後三年程を経たる安政三年四月茅沼の武井忠兵衛雇人鱒釣船頭忠藏なる者漁具伐採の爲登山の際溪間にて炭塊を發見せしに係ると云ふ説との二説があることを發見した。然し何れが如何なる経緯にて此等の説を生ぜしめたるか詳ならず。先づ箱館奉行之が試掘を始めたるも之にも異説あり、同地梁瀬拾次郎氏所藏文獻に依れば安政四年九月櫻庭文左工門を派遣し現品二三十呎を採掘すとあり、「北海立志編」に依れば安政五年栗葉の出張幕吏、採炭、毎年一百呎とあり、又「北海道史第一」（河野常吉）に依る時は其二年後なる萬延元年栗原善八を茅沼に派遣し……試掘とあるを又發見する。然し何れにしても安政四五年頃より萬延元年に至る間の事

實であらう。文久元年十月佐藤仁左工門百石に付き運賃共金三十七兩を以て箱館にて買ひ上げられんことの請願あり、同二年ブレーク、パンペリーをして同山を検せしめしところ其炭質の良好にして頗る有望なることの復命あり、同三年開採擴張の議を起し、大島惣左工門をして採掘せしめたり、これ元治元年二月のことである。惣左工門即ち坑内に留木を使用せば採鑛決して困難ならずとして以前此原因にて採炭の挫折せしを撤廢し、採掘に決し、此時從來の白糖炭山の鑛夫も本鑛山に移して使役した。然るに同年三月より翌慶應元年十一月まで費す所三千六百五十兩一分に上り、炭價頗る高價となるを以て長崎炭に比すれば約五割高遂に之を中止するに至つた。然るに翌二年に至れば幕府復々本坑の開採を圖らんとし、海岸より炭鑛の距離を測量し、更に翌三年幕吏鯉原某等數名英國鑛山師イー・エイチ・エム・ガール E. H. M. Gaird を伴ひ來り、海岸炭山間の道路を開通、倉庫役所設置等従前に比し大規模に經營せらるゝに至つたのである。今參考の爲私が同地の舊家梁瀬捨次郎翁より借覽せし記録及び其他の記事を左に掲ぐ。

〔梁瀬捨次郎氏所藏文獻〕

「安政三年四月茅沼武井忠兵衛氏雇人鯉釣船頭忠藏ナル者漁具伐採ノ爲メ登山シ歸路溪間ニ於テ炭塊ヲ拾ヒ來リ漁夫等相集リ評議シタルヲ噂ニ聞ク唐船ニテ焚クトカ云フ石炭ト云フモノニ非ズヤト。茲ニ於テ試シニ火中ニ投セシニ火勢烈シク燃エシニヨリ隣村白別村ノ番屋平森德藏ニ其次第ヲ告ク。依ツテ同人ハ之レヲ岩内運上家ニ報告シ運上家ニテハ其旨ヲ稟詰公儀役長谷川儀三郎ニ報告シ同人ヨリ其次第ヲ箱館奉行ニ上申シタリ。茲ニ於テ箱館奉行翌安政四年九月櫻庭文左工門ヲ派遣シ現品ニ三十噸ヲ採掘シ箱館ニ運搬ス」

「文久三年四月幕府開採ノ議ヲ起シ大島惣左工門ヲシテ採掘セシメ慶應元年ニ至リ一旦廢業ス」。

〔請負人履歴各請負場所調〕

佐藤仁左工門履歴

「茅沼炭山嘉永五六年頃上方船水主五平太ナルモノ薪水ヲ採ランカ爲メ同所ノ澤ニ入り石炭ヲ拾取リシヨリ評判トナリ安政二年幕府ノ管轄トナリ始テ手入レアリシガ和人ノ掘方

ニテハ果敢シカラサルヲ以テ慶應二年函館奉行ニ於テ其節同處在留英國坑師「エラシムカル」ヲ雇入レ茅沼炭山ニテ海岸ヨリ一里程輪車鐵道ヲ敷設スル事トナリ其用材ヲ始メ倉庫役所坑師館等大小材一萬五千石ヲ一手伐出方其年十二月杉浦兵庫守ヨリ組頭荒木濟三郎申渡サレ達テ辭退セルモ押テ仰付ラレ佐藤仁左工門一人ニテ引受リ其翌慶應三年二月上旬後志川上ニテ七千石岩内尻深川五千石石炭山三千石取ラセシモ運送中流失セルモノアリ、非常ノ困難ヲナシテ一萬四千石ヲ上納シ其秋ヨリ道路普請及ヒ石炭坑ニ取掛レリ、又炭山御用達ハ仁左工門ト田村新石工門二人ニ命セラレ日々御役所へ出勤支配人其外召仕ノ者ニ迄始終詰サセ御用勤メ居リシニ付追テ隆盛ノ上ハ石炭出商ノ内五分ヲ用達兩人ニ手當トシテ下サル御内沙汰モアリタリ然ルニ其年モ暮レ明治元年トナリ更ニ石炭山モ御改正云々。

〔北海立志編〕五（安政）年歌棄出張徳川幕府ノ吏該鑛見分ノ爲メ出張アリ其ノ屬吏三名ヲ殘シ置キ石炭ヲ採掘スル毎年一百叭程ナリ（中略）二（文久）年幕府開採擴張ノ議ヲ起シ大島某ヲシテ試掘セシム慶應元年一旦休業ス二年再ヒ本坑開採ノ盛大ヲ圖リ海岸ヨリ炭鑛ノ距離ヲ測量ス三年幕吏蛭原某等數名英國鑛山師イ・エーテ・エム・ガールヲ伴ヘ來リ坑夫及土方數千名ヲ募リ先ツ海岸ヨリ炭山迄道路ヲ開通シ益々擴張ヲ圖リシニ四年戊辰ノ役起ル。

尙年詳なるも以上の外石狩在勤荒井金助は巡回の途次空知地方に石炭發見すと

* 此外「北海道史第一」並に「新撰北海道史第二卷」を参照するべきであるが今は之を省略する。

- (1) 大日本古文書 卷十 一三五頁
- (2) 同 書 卷十四 二三八頁
- (3) 同 書 卷十七 三六頁

「石油」文久二年幕府はブレーク・パンペリー等をして山越内の油田を踏査せしめ、又年月不詳なれども荒井金助は厚田場所海邊に石油の湧出するを見下僚をして探檢せしめ更に山中にて油脈を發見す。

「土石」 「黄土石黄」は古部山^{ベカヤ}にて官營せしか「砥石」は河波川^同にて一は姓名不詳他は女奈ノ澤民甚右工門「砥石」は河波にて江戸湯ノ島の民松藏なる者「燈石」は尾札部村^{同上}にて村民與五右工門等何れも安政二年開發せしも後廢止するに至りしものである。尙幕府は文久二年ブレーク及びパンペリーをして本島鑛量を試驗せしめた。其結果につきては之を省略するも「北海道志」^{卷之二十四}を參照すべきである。

前發展に於いて見たる温泉は其後尙もヤムクシナイを初め多く東蝦夷地に其名を見る。然し其發展は殆ど此前期發展に近き頃にして當代發展の一樣相中に取り容れて見ることに其意義極めて乏し。例へば次の如くである。(千島志料第七十二)

ニヲトマリ温泉。(東海參譚)

ヤムクシナイ温泉の氣ユウラツフ温泉の氣。ユウブツ湖水……水ぬるみ流る。ユウトウ水ぬるみ……湖水。

シヤクベツ河水溫流。(東蝦地名考……秦樞丸撰)

ユウラブ温泉數ヶ所。ユウフツ温泉。イウトウ沼溫泉の氣。ユウベツ湯の川。ユヲトマリ此處丘に湯あり。

ヨイチ温泉(松蝦地名通解)

フウラウ^{エン}溫泉の氣ユウトマリ温泉三所(東蝦地名考)

クスリワキ湯あり(松前一圓行程記)

參考文獻

箱館奉行所「安政度蝦夷地經營始末」。松浦武四郎「西蝦夷日誌第三編」。開拓使「北海道志」(卷之二十四)。北海道廳(多羅尾忠郎)「北海道鑛山略記」。北海道廳(河野常吉)「北海道史第一」。北海道廳(同上高倉新一郎加筆)「新撰北海道史第二卷通説一」。梁瀬捨次郎翁藏文獻。高崎龍太郎「北海立志編」。

三 當代本嶋鑛業の發展特徵生成の理由

採鑛業の現象が經濟文化の或程度迄發達せる人間間に於て先づ之を見ることを得るといふことは曩に既に觸れ置きたる所である。本嶋に於ける斯業も亦從前原史時代を既に去りたる松前氏時代に入れば其前代迄とは異り漸くにして之が擡頭を見、例へば砂金採取の如き一時或程度の隆盛さへも示すに至つた。然れども之も一時の現象に止り又他一般鑛業界と共に其後の經過は兎角不振廢頽の儘にて繼續したのである。然るに之が當代に至れば再び而も活潑なる勃興を始むるに至りしことに於て、また蓋し故なきに非ざるのである。

當代斯業發展の生起せし所以のもの擧ぐれば勿論一にして足らずであつて多々之を數へ得べしと雖就中原鑛の存在といふ自然的原因と、社會的原因とが有る。原鑛の存在に就きては之を省略するも此自然的原因に對して社會的原因を少く述ぶることとする。此種原因には政治社會的と經濟社會的なる二大素因に分別せらるゝけれども先づ之を暫く適所に從つて言を進めて行くとせば既往の状態の比較に於いて、第一に以前には幕府にせよ本藩にせよ官に於ける斯業發展政策なるものが何等實施せられなかつた、從つて例へ一、二の發展の見るもの有りとしても夫は唯民間自體の發動に基く彼等自身の經營に過ぎざりしも當代に入るに及びては之に反して幕府の銳意之が開發に當る所となり或は自ら經營するあり、或は民間への獎勵あり、又他方松前藩に在りても亦之を經營する所無きに非ず。斯くした官營と相俟つて幕府の獎勵は民間も之に誘發せらるゝの結果自然官・民相共に斯業の開發に努むる所となつたのである。これ以前の民間の自主的活動のみに因る發展を特徵とせる時代とは其發展的性質を異にせる點である。然らば何故當代に至り斯く斯業の開發が要求せらるゝに至りしかと云ふことである。之には或は幕府が其府庫窮迫に對する應急策の一現れといふことも考へられるであらう、或は又此種事業は一般に開拓の先驅をなすの諸國の例あると同様本嶋開拓にも自然之が例に洩れず隨伴せし一現象とも觀られ得る

であらう、同時に又吾人の特に注視せらるゝは從來迄の發展が大略金屬性的原鑛就中砂金のみが主たる開發對象なりしに對し當代は從來の斯かる金屬性に關る各種採掘開發のみならず、非金屬性就中石炭・硫黃等の採掘も漸く活動を開始するに至りし理由にして、これ即ち一面に於いては國內需要の増加、他面に於いては當代に至りて急展を見せし外國關係に因りしものである、即ち石炭は箱館に來舶する外國汽船の何れも其供給を要求せるを以て箱館奉行之が採掘を始めしものであり、硫黃は亦國內需要に供せし外、外國へも輸出せしものあるに至りしことである。

(1) 採鑛上の研究調査には外國専門家を招聘して其採鑛技術に當らしめ或は之が調査をなさしめたること上述に依りて明であるが幕府は文久二年ブレーク及びパンペリーをして鑛量を試験せしめし結果「金」は河汲は唯硫化鐵・石英・硫酸石灰・硫化銅鐵のみであり、クヌイは利別川の本流支流に沿ひ數英里に亘り金粒細にして泥石を含める沙石層に跨り厚さ二十六呎の砂礫中より出づ。當時費用一日大凡三弗採額大凡五十弗の價値あり。「鐵」は古武井砂鐵純粹なる如く「鉛」は一ノ渡は鑛脈の幅皆二、三尺、將來盡るの患なきも其產量豊富ならず。堅岩一尺に三十枚、軟岩は一尺に七十枚、極堅岩を鑿つ時は一尺を以て一人五日の業と爲す。費用一日炭を合して大凡三弗なりと。

宇志別（硫黃登に在り）煤坑は大凡八尺中央は純粹の石炭なり。山越内油井は質濃厚、色吧嗎油の如く量も多からず。藥材・燈油又は製墨の用に供すべしとの報告あり。（詳細は「北海道志」卷之廿四參照のこと）

(2) 幕府の民間への斯業獎勵に關しては安政二年七月の「蝦夷地開拓觸書」にも

「金・銀・銅・鉛山開掘之儀、自分入用を以相試度存候ものは、年季を限り御免許可有之候。且掘出候礦類は直に御買上可有之事」。

「石炭掘取方相願候者は地所を定め、御引渡可_レ有_レ之事」。

とあり。且又其後の事實的經過として前記年代順的説明に合せ徴すれば此間の事實的なる消息は明に知られ得る。

(3) 硫黄の國內需要は斯くして之を見ると云はるゝ(北海道史第一九三六頁)も、當時國內の工業は漆器・陶磁器・織物・製紙・建築・造船・武器等の美術工藝品にして化學的工業の未だ開けず、従つて上記本島硫黄は何れの工業に需要せられたるや燐寸の如きも明治八年の創始に係り、唯火藥の製造か硫黄華(藥用)の原料として僅少の量が或は需められたるにも非ざるか、何れにしても之が販路先の用途は詳なるを得ず。されば當時民間販路の未だ開けずと云ふも事實でありしであらう。

又第二に斯業發展の性質として當代に特殊的なるは其發展方が當代は前發展期の夫れに比し急進的に行はれし傾向たりしことである。これ一は幕府の財政打開策の一現れにして此事たる前發展期末葉に於いて幕府既に其財政挽回の一大方策として之が開發に視野を向けしことの前例もある事であり、幕府崩壞の大なる一因が其財政的破綻に在りとさへ云はるゝ當代の事なれば此方面の急務に押されたるを一大要素とせるが故の急進的發展といふことも考へられるであらう、之と共に又大なる素因は當代に至りて急展せし對外關係にして本嶋開拓が兎もあれ前發展時代なる平時とは異り當代は國防急務の騷然たる時代であり、此國防開拓の先驅として現れた斯業といふことよりしても其開發の急進的なるは洵に自然なりと云ふべく、其輿論としても例へば堀箱館奉行に従ひ蝦夷地を巡察せし横井豊山の如き安政元年其意見書なる「北門私議」中所論あり、金屬鑛に關して曰ふ生活文化の進展と金銀銅鐵の利用、日本本地の其推移として中古以來足利時代の奢侈的移行錢材の用、秀吉の奢侈と金銀鑛山の開發より大判小判・丁銀等の鑄造、より初めて本邦金銀の用途の擴大を見るに至りしこと、然して徳川氏とな

るより彼は以上の如き必要を豫知し、大久保石州をして佐渡の鑛山を開かしめ、益々其盛大を致せり、然るに金銀銅は年々外國へ流出し國材を次第に消耗するに至つた、新井筑州の書を見れば正保五年より寶永五年に至る六十一ヶ年間海外流失類を見るに二百三十九萬七千六百兩餘、銀は三十七萬四千二百九貫目餘、銅は寛文三年より寶永五年に至る迄三十六ヶ年間約一億一千四百四十九萬八千七百斤餘の巨額に達すと。然し尙其他長崎にて拔荷あるべく、近來諸國とも惡錢を排し良錢を撰らふ。これ多分は唐商へ出すのである、金銀の通用を少くする往古の質素に歸らしめんとするも大勢抑し難し、然らば佐渡に十倍する産地あり、これ蝦夷島一團にして本邦の大改革を成すに足るべしと。即ち同書に曰く

五金 第六

金銀銅鐵ハ世ノ寶ナルコト萬國皆然リ然レトモ往古ハ風俗質素ニテ金銀ノ用モ自ラ少カリキ風化ノ開クニ隨ヒテ金銀ノ用漸ク多クナリ行キ天下靡然トシテ利ヲ爭フコトト爲レリ此亦自然ノ勢ナリ試ニ本邦ノ中古以來ニ就テ之ヲ論スルニ足利氏ノ時物ゴト漸ク奢靡ニ推シ移レリ然レトモ義滿明ノ封ヲ受テ後永樂錢十萬貫ヲ明帝ニ請セ國用ヲ給セリ十萬貫ノ錢ハ當今大阪中戸ノ商賈ハ皆咄嗟シテ辨スヘシ其後豐太閤奢侈ヲ好ミ諸國ノ鑛山ニ就テ金銀場ヲ開キ大小判金分金丁銀等ヲ鑄造シ本邦金銀ノ用始テ廣シ物徂徠ノ論セシ如ク國初以來士人士着セザリシヨリ金銀非レハ一日モ用ヲ給スコト能ハス然ル處東照公時勢ノ斯ク移リ行クヲ豫メ前知セラレ大久保石州ヲ擧ケ佐渡ノ鑛山ヲ開キ鼓鑄益々盛ンニシテ遺昇平鼓腹ノ豐盛ヲ成セリ但金銀銅年々外國ニ出ルニ因リテ國家ノ精液ヲ次第ニ耗滅セリ嘗テ新井筑州ノ著書ヲ讀ミシニ正保五年ヨリ寶永五年ニ至ル迄凡六十二年ノ間異國ニ渡ル金高二百三十九萬七千六百兩餘銀高三十七萬四千二百九貫目餘寛文三年ヨリ寶永五年ニ至ル迄凡三十六年ノ間銅一億一千四百四十九萬八千七百斤餘ト記セリ亦夥シカラスヤ其外長崎ニテ拔ケルニ出ル者亦多カルヘシ

予ノ幼キ頃ハ九州邊ニテ一繩貫百六十文ノ錢中ニナベ錢ト唱フル惡錢僅々タルコトナリシカ近來ハ大抵ナベ錢ノミニテ却テ良キ錢ヲ僅々ト數ヘルナリ諸國トモニ富家翁良錢ヲ擇ミ儲ル者アレトモ多分ハ唐蘭へ關出スル故ナリ扱テ當今人々口癖ノ如ク金銀ノ通用ヲ少クシテ往古ノ質素ニ復セント論スルトモ是ハ甚ク難キコトニテ先ツ士人ヲ悉ク土著セシメ痛ク末ヲ抑ヘ本ヲ務メシムルニ非ラサレハ出來サルコトニテ一ノ堯舜禹稷契皋陶世ニ出サレハ徒ニ畫餅ノ論トナルノミナリ夫レ國初ハ一ノ佐渡島ニテ此三百年ノ泰平ヲ盛ニセリ而ルニ今十ノ佐渡島アリ蝦夷島一圓是ナリ必本邦ノ大改革ヲ成スニ足ルヘク大砲巨艦之ヲ辨シテ餘裕アルヘシ蓋シ蝦夷曠開ケナハ其利黎爾牧畜ニ十倍ナルヘキナレトモ予曠事ニ暗ケレハ一々試驗スルコト能ハス因テ姑ク材木ノ下條ニ於テ之ヲ論スト云

又石炭に關しては同じく同書に於いて火輪船（軍艦のことならん）は古來西洋諸國之を用ひ居るを以て學びて軍用に備へざる可からず、其石炭は今蝦夷地島より樺太島へ亘りて産額の夥きを見る、之を外國人へ知る時は其獲得の爲に如何なる奇禍を生づるやも計り難し、現に露人八九人此島ノテトに上陸採掘し居るを今井八九郎見受けしと。先づ之を樺太より始め採掘に經驗ある者を選び二三月頃より八月頃迄之を掘らすべし、とて更に此島の本部確保論を進む、即ち曰く

石炭 第四

大利ノ所在必ス大害ノ所伏ナリ故ニ已ムヘナケレハ爲サルヨリ善キハ莫キ事ナリトモ國家ノ大利益ニシテ不可已ノ事アリ火輪船是ナリ是レ實ニ古來未曾有ノ奇巧妙術ニテ西洋諸國皆之ヲ用フ是レ學ンテ軍用ニ備ヘサル可ラス但豫メ其變ノ之カ所ヲ料リ嚴ニ之カ制度ヲ立ルコト肝要ナリ扱テ石炭ハ諸國共ニ大抵アル者ナレトモ深ク

地ヲ闕テ探ルハ其所得不償所失シカルニ今般蝦夷東西岸ヨリ唐太島ヲ經過シテ石炭ノ夥キヲ觀テ實ニ可驚可喜
 又可懼ナリ何トナレハ如此夥キヲ洋虜知りナハ何様ノ奇禍ヲ生センモ料リ難シ豈懼ル可キナラスヤ既ニノテト
 ニハ魯西亞人八九人上陸致シ石炭ヲ掘リ居ルヲ今井八九郎見届ケ歸レリ然處幸ニスメレンクル不服ノ由ナレハ
 速ニ我ヨリ恩惠以テスメレンクルヲ懷ケ先ツヲシヨロ以北ホロコタン邊ヨリ採リ始ム可シ其採之ノ方奈何ト
 ナレハ石炭ノ事心得アル者ヲ擇ヒ二三月頃ヨリ彼地ヘ遣シ八月頃マテ掘ラス可シスメレンクルハ稍狹ニシテ利
 ヲ逐フコトヲ知ルコト蝦夷人ノ無慾ト異ナル由ナレハ必ス來テ日傭ニ使ハルヘキコト疑ナシ因テ我ヨリ相當ノ
 賃ヲ米酒煙草木綿錢器彼ノ欲スル品ニテ與フ可シ是亦惠而不費ノ義ニテ唐太一回ヲ我カ版圖ニ收ルコト全ク此
 一舉ニ在リ孟子ノ言シ如ク唯此時ヲ然リトス失フ可ラス

と。而して更に又之に言及を加ふるなれば當代に至り急に展開せし外交關係に基く外國よりの需要を招徠せしこ
 との頻繁といふことも數へらるべき主たる素因であつたことも考へられる。

結 語

鑛業は其性質上或程度文化の發達せる段階に入れる人間社會間に其發展現象を見る。明治維新前に於ける北海
 道鑛業も本嶋一般經濟の發展段階に於いて其原史時代と私案せる時代を過ぎ、之が發展時代と思はれる前松前藩
 の成立期たる天正末期より明治へかけての二百七十年間に於いて人的に觀て従前に比し、文化程度の向上せる和
 人の出入あり、又夫に影響せられて此地住民（和人）一般も亦之が向上を來せるあり、斯くして世情の發展的趨
 勢は本嶋一般經濟の發展を刺戟すると共に延いては其範疇として採鑛業に於いても亦遂に發展現象を辿らずには
 措かなかつた。

本嶋一般經濟の發展期は上述の如く天正末期以降明治に至る二百七十年間とするが此間に於いて本嶋鑛業は大發展期を區劃づけた。其第一次的發展は此全期間中最初の二百年間にして「主として民間の自主的活動に基く漸進的なる發展」を特徴とする長期間に亘れるものであり、第二次的發展は之に反して明治時代に入る直前僅か十三箇年間にして「主として官・民協力的活動に基く急進的なる發展」を特徴とせる短期に亘れる發展であつた。此第一次的發展を成立せしむる爲には爲政者も又民間に在りても極めて平和的、無刺戟的時代なりしといふこと、特に鑛産物を原料とする製造工業又は燃料等を要求する方面に本島は固より日本本地に在りても未だ之が展開を望み得ざる當時の趨勢に於いては、本嶋に在りても爲政家たる松前藩の消極的方針よりすれば勢ひ斯の如き發展特徴を形成するに至るも自然であらう。而して第二次的發展期直前たる安政元年迄には五十餘年もある。

此間は格別の刺戟も無かりし爲一時衰微の状態に置かれたるが安政年間近くに入るや國內に在りては幕府は財源の逼迫に際會し其補給策に汲々たる實情に在り、又民間の製造工業も幾分かは發展を見たるべく、又當代に入れば他方對外關係も生起し、一面には國防開拓の姿となつて出現し、他面には外國人よりの需要の姿となつて促され、官の奨励と成俟つて第二次的斯業展開へと移行せざるを得ざりしに至つたものである。また自明の理と云はざるを得ない。

維新前本嶋斯業の發展は斯くして形成せられたが、斯く發展を形成せしめし者又斯く發展を持続せしめし者は小數ながらも開化的和人の活動にして特に蝦夷の如き安政元年未だ一萬六千の多數を數へ得らる可し（和人は嘉永六年當時約六萬三千）*と雖當時尙原始的生活より脱し居ざりし彼等間には斯業の發展に就いては格別に寄與する所も無かつたのである。即ち之に依て未開地開拓の人的資源には其數の徒に多きといふよりは例へ少數なりといへば素質の優等なるを根本條件と爲されざる可からずといふ一大理由を吾人に示しつゝ明治時代へと移行せし

といふことに吾人は更に留意するべきである。

*北海道史第一（河野常吉） 八一―九頁

北海道舊土人（同上） 一一―一二頁